

# 労働価値論の生成にかんする一考察

——その自然価格論との関連を中心として——

松 田 弘 三

労働価値論は、いうまでもなく、価値の効用理論に対立するところのその費用理論の一種であり、しかもそのうちのもっとも巨視的・長期的な、したがってもっとも根元的な原理である。この原理があきらかにされることによって、経済学ははじめて科学としてのその体系を統一するところの基礎原理をもつことができたのである。

というのは、つぎのような理由による。ある特定の日に特定の市場で売買される特定の商品の価格を決定するためには、その商品の供給量とそれになりたいする有効需要の量がわかればよい。すなわち、単純な需要供給説で十分である。しかし単独ではなく多数の、また特定の時のではなくもっとも長期の、商品価格を決定するためには、需要供給説は、価格の決定を恣意的な諸要素にゆだねるという致命的な欠陥をもつ。そのようなばあいには、すなわち資本制的基礎において生産され、競争的条件において販売される一群の商品の平均価格を決定するためには、賃銀と利潤の水準を独立的に決定される要素とみなし、「原価」に「自然率」の利潤を加えたもの、すなわ

ち「自然価格」が市場価格の変動の中心をなすものと考えることが出来る。したがってこのばあいには、生産費説で十分である。しかるに全社会の資本制的に生産された商品全体の、長期における平均価格の決定においては、「自然価格」の構成要素を独立的に決定されるものとみなすことはできない。なぜならこれらの要素そのものが商品の価値に依存するからである。したがって資本制生産の全機構を分析しようとする経済学は、商品の価値と同時に、生産諸要素——労働力と資本——の価値をも決定しようとする、価値原理をもたねばならない。<sup>(1)</sup>このような要件をみたしうる唯一の価値論が、すべての費用を労働に還元するところの労働価値論であつて、それは自然価格論とともに、その先駆者をふくめての古典経済学において、樹立されたものである。

以上のべたところは、価値論を価格論の前提としてのみとらえ、価値の量的規定に偏してその質的規定を軽視するようにみえるかもしれないので、ここで価値の本質についてふれておく。人間は生きてゆくためには、労働によつて自然に働きかけて、自己の必要とする物を獲得しなければならぬ。この労働・生産を、人間は孤立的ではなく共同的に起こさない、次第に人々はそれぞれ異なつた生産活動にたずさわるようになる。また生産手段は、はじめは共同的に所有されたが、やがて一部の人々の私有となる。こうなると、生産物はたがいに交換され、次第にはじめから交換を目的として生産されるようになる。社会的分業と生産手段の私有とを前提とするこういう生産が商品生産であり、その生産物が商品である。資本制生産は、人間の労働力もまた商品となるような商品生産の最高の発展形態であり、そのもとではじめて生産物の商品形態が一般化する。このような商品生産のもとでは、人々の労働は、相互に独立して営まれる私的労働であるから、生産者たちは、彼らの労働生産物の交換によつてはじめて社会的に接触し、私的労働は、交換が労働生産物およびそれを媒介として生産者たちを、

入りこませる連関によつてはじめて、社会的総労働の一環であることをあきらかにする。かくしてここでは、人と人との社会的関係が物と物との社会的関係として現象し、<sup>(2)</sup> もろもろの生産物の生産についてやされた社会的労働のそれぞれの部分は、価値の形態において表現される。それゆえ、価値は、資本主義社会のもつとも基礎的な生産関係たる商品生産関係を表現するものであり、また価値法則は資本制的なもろもろの生産関係のもとにおいていつそう発展した形態において貫徹するものであるから、したがって価値論は、資本主義体制の全体的な把握のための原理である。<sup>(3)</sup> 価値論は、このような体制認識の原理としての質的側面と、価格論の基礎理論としての量的側面との、統一でなければならぬ。

ところでさきに見たように、生産費説は労働価値論よりも、いつそう現象的な資本制生産関係の把握であり、ある意味ではそのより複雑な、より具体的な関係を反映するものであるが、経済学の歴史においては、生産費説というよりむしろ「自然価格」論の形成は、たとえ歴史的には正確にそういえないにしてもすくなくとも論理的には、労働価値論の成立に先行したもののようである。<sup>(4)</sup> だがそのことは、経済学における複雑な具体的なものから簡単な抽象的なものとすすんでゆく下向法と逆に簡単な抽象的なものから複雑な具体的なものへのぼつてゆく上向法との関係、すなわち後者が科学的に正しい方法であるが、経済学の発生にあたってはまず前者の方法がとられたという<sup>(5)</sup> こと、を理解するならば容易に了解されえよう。本稿においては、経済学の歴史における、この自然価格論の形成を中間項とする、労働価値論の生成過程をあとづけたいとおもう。

(1) Maurice Dobb, *Political Economy and Capitalism*, pp. 8-10. 岡稔訳、政治経済学と資本主義、八一九ページ、お  
45' Ronald L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, pp. 32-33. 水田洋・宮本義男訳、労働価値論史研究、

労働価値論の生成にかんする一考察(松田)

二九一三〇ページ、参照。（ただし、以下の引用において、訳文は若干変更したところがある。）

- (2) Karl Marx, *Das Kapital, Besorgt vom M.-E.-L. Institut, Bd. I, s. 78.* 長谷部文雄訳、青木書店版、一七三—一七四ページ。
- (3) 高島義哉、価値論の復位、理論社編、近代理論経済学とマルクス主義経済学、二一ページ、参照。
- (4) R. L. Meek, *Studies, Chapter I (& II), pp. 11-44 (—81).* 訳、一—四五（—九四）ページ、参照。
- (5) K. Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie, Besorgt vom M.-E.-L. Institut, SS. 235-236.* 邦訳、マルクス＝エンゲルス選集、補巻3、二七七—二七九ページ。「わたしが人口からはじめるとすれば、それは全体についての一つの混沌とした表象であって、いっそうくわしく規定することにより、わたしは分析的に、次第にもっと簡単な諸概念に近づくとになる。すなわち、表象された具体的なものからますます稀薄な抽象的なものにすすんでいって、ついにはもつとも簡単な諸規定に到達するであろう。そこには今度はふたたび後方への旅がはじめられて、最後にふたたび人口にたどりつくであろう。だが今度は、全体についての一つの混沌とした表象としての人口ではなくて、多くの規定と関係とをもつ豊富な総体としての人口にたどりつくであろう。第一の方法は、経済学がその發生にあたって歴史的にとつた方法である。たとえば十七世紀の経済学者たちは、つねに、生きた全体、すなわち人口、国民、国家、多数の国家等々からはじめた。だが彼らは、つねに分析によって、二三の規定的な抽象的、一般的諸関係、たとえば分業、貨幣、価値等々をみつけどすことにおわった。これらの個々の契機が多かれ少かれ固定され抽象されるやいなや、労働、分業、欲望、交換価値のような簡単なものから、国家、諸国民間の交換、世界市場にまでのぼってゆく経済学の諸体系がはじまった。このあとの方法はあきらかに、科学的に正しい方法である。云々。」

## 二

「近代的生産様式の最初の理論的とりあつかい——重商主義——は、商業資本の運動において自立化した流通

過程の表面的諸現象から出発し、したがって仮象だけをとりあげた。というのは、部分的には商業資本が資本一般の最初の自由な存在様式だからであり、また部分的には、それが封建的生産の最初の変革期——近代的生产の成立期——におよぼした圧倒的影響のためである。真の近代的经济科学は、理論的考察が流通过程から生産過程に移行するばあいには、はじめてはじまる。<sup>(6)</sup>「重商主義 (Mercantilism) の本質にかんするこのマルクスの規定は、重商主義的価値論なる概念を一般に不可能なものとみなしているようにおもわれる。事実、貿易差額 (Balance of Trade) 説の主張を中心としたトーマス・マン (Thomas Mun, 1571-1641. 主著、England's Treasure by Foreign Trade. 一六二八年ころ執筆、一六六四年公刊) を代表者とする本来の重商主義思想においては、富を主として貨幣ないし金銀において把握し、富の増殖は流通过程——なかならず外国貿易——において可能であると考えたのであるから、<sup>(8)</sup>そこには価値論成立のための地盤はほとんどなかったといつてよいであろう。

(9) K. Marx, Das Kapital, Bd. III, s. 369. 訳、四七八ページ。

(7) 重商主義の本質規定にかんして、わが国の学界には、周知のように、二つの相反する見解がある。一つは、本来の重商主義を——それを名譽革命 (一六八八年) 以降のイギリスに限定したうえで——、前期的商業資本の特権 (独占) に対立する、初期産業資本の保護主義と解するものである。それは元來、中産的生産者層のマニファクチュアの産業資本家への成長を資本主義の承譜として一面的に強調し、商業資本一般を「前期的」反動的なものとみなす大塚史学——大塚久雄教授の重商主義観は、「重商主義成立の社会的基盤」(舞田教授還暦記念論文集『古典学派的生成と展開』一九五二年所収) および「重商主義における〈Trade〉の意味について」(矢内原教授還暦記念論文集『古典派経済学研究』一九五八年所収) に見られる——に立脚するものであつて、戦前においては張漢裕氏——後収、『イギリス重商主義研究』一九五四年——、戦後においては小林井教授——『重商主義の経済理論』一九五二年、『重商主義解体期の研究』一九五五年、『経済学史研究序

労働価値論の生成にかんする一考察 (松田)

説』(Ⅲ)「重商主義」一九五七年など——によって代表される見解である。いま一つは、重商主義をもって、近代の西ヨーロッパにおける資本の本源の蓄積期（生産方法からいえば本来的マニファクチュア時代）——十五世紀末ないし十六世紀はじめから十八世紀の六、七〇年代まで——の経済政策体系であり、これを基礎づける思想体系であったとし、重商主義の経済的支柱は商業資本であった——外国貿易に従事する特権的・独占的商業資本であり、同時にマニファクチュアを生産的基礎とした商業資本であった——と解するものであって、白杉庄一郎教授——『近世西洋経済史研究序説（重商主義政策史論）』一九五〇年、『経済学史概説』一九五六年——によって代表される見解である。後者の見解が、重商主義にかんするアダム・スミス以来の伝統的理解を理論化したものであることはたしかであるが、それが史実に則したものであるとともに、マルクスの規定にも合致したものであるとおもわれる。

(8) トーマス・マンの著『A Discourse of Trade from England unto the East-Indies, 1621. による England's Treasure by Forraign Trade, 1664. は、トマス・マンの『Early English Tracts on Commerce, edited by J. R. McCulloch, reprinted in 1954. に収められており、後者には、張漢裕訳（岩波文庫）、一九四二年、両者について、堀江英一・河野健二訳、一九四二年、がある。なお前述の富およびその増殖観にかんするかぎりでは、重商主義思想の他の代表者チャイルド (Josiah Child, 1630-99)、『ダヴナンナ (Charles Davenant, 1656-1714)』その他の人々においても、相違はない。

しかるにロンルド・L・ミークは、『労働価値論の研究』において、「アダム・スミス以前の価値論」を概括するにあたって、「重商主義的価値論」なる概念をたて、それを「十六世紀および十七世紀はじめ」の「重商主義の初期に特徴的な価値論」であるとしている<sup>(9)</sup>。その内容はつぎのようなものである。スコラ主義が衰えてゆく時代に、公正価格 (just price) の学説を、拡大する商業とくに商人のもうけを正当化することとの必要性におうじるように展開しようとした人々は、生産者価格の観点による価値の理解から、「便宜価格」(conventional

price. 慣習的に支払われ受取られる価格)によるその理解へと後退した。それは商品の価値がある程度買手の効用に依存すると主張することによってなされた、と。<sup>(11)</sup>

そしてミークは、この「重商主義的価値論」を、つぎの三つの観念に整理している。第一に、商品の価値は、その市場価格とひろく同一視された。第二に、この価値の高さは、需要と供給とによって決定されると考えられた。第三に、「内在価値」(intrinsic value)すなわち効用という概念があらわれはじめ、それは価値あるいは市場価格と区別されながらも、それらと因果関係にあるものと考えられた、と。

さらに彼は、これらの三つの観念が、——年代的にはずつとあとであり、つぎの段階との境界にあるものであるが——ニコラス・バーボン(Nicholas Barbon)の『貿易論』(A Discourse of Trade, 1690)のうちに集中的にあらわれているとする。<sup>(13)</sup> すなわち、バーボンはつぎのようにいつている。(一)、「商品の価格は現在の価値である。……市場は価値の最善の判断者である。なぜなら、売手と買手との集合によって、商品の量およびそれになりたい必要がもつともよく知られるからである。物はちようどそれが売られるだけのねうちがある。」(二)、「商品の価格は現在の価値であつて、それらの必要または効用を、その必要に役だつ量で算定することによってあらわれる。……必要にくらべて豊富であれば、物は安価になり、稀少であれば高価になる。」(三)、「すべての商品の価値はその効用から生じる。効用を欠くものは価値をもたない。……物の効用は人間の欲望と必要をみたすことにある。」<sup>(14)</sup>

ミークの定式化は、重商主義期の混沌とした価値概念を理解するためにきわめて便利なものであるが、その一般化がどこまで包括的でありえたか——したがってバーボンをその典型とみなすことができるかどうか——はともかくと

しても、このような「価値論」が実は価値論の未成立をしめすものにほかならないことはたしかであろう。それは、彼のいうように、商人の立場からの価値の把握であつて、商人は価値を市場価格によつて考え、価値にたいする需要（したがつて効用）の影響を重視し、利潤が消費者によつて支払われるもの（すなわち「讓渡利潤」）とみなしたこと、そしてそれらが、商人がまだ生産過程を支配せず、生産手段がほとんど直接的生産者の手中にあつた初期重商主義時代の現実であつたといふことは、事実であらう。眞の価値論は、彼がみとめているように、「産業資本の成長の迫力」が「経済学者の精神」に大きな影響をおよぼすことによつて、はじめて生まれ得たのである。<sup>(16)</sup>

(9) Meek, *ibid.*, pp. 14-15. 訳、六一七ページ。

(10) ミークは、中世の教会法学者 (Canonist) の価値にたいする理解を、生産者価格にもとづくものと考え、彼らは、価値の問題に商品生産者としての人間活動という観点からとりくんだのであり、そのかぎり古典経済学者と共通なものをもつというが (*Ibid.*, p. 12. 訳、二一三ページ)、このような理解には疑問がある。なぜなら、公正価格の概念は、価格は生産における費用と努力に比例すべきであるという、規範的なものであつて、それは商品＝資本制社会の内在的法則の把握としての労働価値論とは、次元を異にするものであるからである。

(11) *Ibid.*, pp. 14-15. 訳、六一七ページ。

(12) 'intrinsic value' の概念は、中世の教会法学者以来十七世紀末のペティ、ロック、バーボン、ノース、ダヴナントらにいたるまで、もっぱら使用価値を意味した。それが十八世紀のカンティロン、ハリス、ステュアートにいたつて、生産費にもとづく価値の意味に転化し、さらにリカードにおいては絶対価値の、マルクスにおいては商品価値の同義語として用いられるに至つた。(平瀬巴之吉『経済学の古典と近代』、二二〇—二二四ページ。)

(13) Meek, *ibid.*, pp. 15-16. 訳「七一八ページ」。

(14) Nicholas Barbon, *A Discourse of Trade*, reprinted by Hollander, pp. 15-16. 久保芳和訳『『交易論』、二二—二三ページ。p. 15. 訳「二二ページ」。p. 13. 訳「一八一—一九ページ」。

(15) バーボンは主観価値説ではない。彼は効用が価値の基礎だというにすぎない。さきの引用文にもあらわれているように、物の価値は、それらにたいする必要 (occasion) または効用 (use) とそれらの量、すなわちその豊富または稀少との関係によって定まるというのであって、流通論的な価値把握の一類型である。平瀬氏はこれを「稀少価値説」と名づけられている。(前掲書、二二六—二三一ページ)。

(16) Meek, *ibid.*, p. 18. 訳「一〇ページ」。

### III

「十七世紀の末ちかく、とくにイギリスにおいて、価値についてのふるい生産者價格的理解が、復活のきわだつたしるしをしめしはじめる。」<sup>(17)</sup>とミックはのべている。しかし、それがふるい見解の復活ではなくて、新しい現実を反映する新しい見解であることは、すでに指摘したところである。それは当然のことである。価値法則の十分な展開をゆるすところの、資本制生産様式はいまはじめて生まれようとしていたのであるから。「次第に多くの強調が、生産價格に、とくに製造業において、おかれるようになる。……経済的思考におけるこの革命は、経済的実践における革命の反映であった。」この時代に、「生産組織のなかにおこりつつあった広汎な変化」は、まさに、マニファクチュアという形態における産業資本の形成をみちびきたものである。

この変化は「内外双方から」<sup>(18)</sup>おこなわれた。「外から」は、(一)、商人が直接に産業家になるか——貿易によって

外国から輸入された奢侈品マニユファクチュアのようなばあい——、または、(二) 商人が、直接生産者を自己に隷属させる間屋制度の形態をへて、マニユファクチュアの産業資本家に転化する。だが、このばあいには旧生産方法を徹底的に変革せず、これを保存することによって、資本制生産様式の成立をおくらせる。「内から」は、(三) 生産者が商人兼資本家になる、すなわちいわゆる「中産的生産者層」（毛織物業を兼ね営む独立自営農民や同職組合キョウギの小親方）がマニユファクチュアの産業資本家に成長する。これが資本制生産様式の成立のための真に革命的な道である。<sup>(19)</sup> 以上の過程の結果としてのマニユファクチュアの発展は、イギリスにおいて、十六世紀中ごろ以来みられたところであるが、ピューリタン革命（一六四〇—一六〇〇年）ないし名誉革命（一六八八年）の時期にいたっては、すでに決定的なものとなっていたことはあきらかである。

(17) Meek, *ibid.*, p. 18. 訳、一〇ページ。

(18) *Ibid.*, p. 18. 訳、一〇—一ページ。

(19) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. III, SS. 366-368. 訳、四七四—四七六ページ、参照。

このような資本制生産様式の成立のためのもっとも重要な前提条件は、いうまでもなく、「自由な」——封建的束縛から解放されるととも、いつさいの生産手段を失った——労働者群が、大量的につくりだされるということである。この直接的生産者と生産手段との歴史的な分離、とくに農民からの土地収奪の過程も、イギリスにおいて、エンクロージヤとして十五世紀末ないし十六世紀はじめ以来進行し、資本の本源の蓄積の基礎をなしたのであるが、<sup>(20)</sup> 十七世紀の最後の四分の一期には、すでにその重要性がひろく感知されるほどになった。<sup>(21)</sup>

「古典経済学および、それとともに古典的価値論がはじまるのは、実に、資本主義的基礎において組織された

『自由な』賃労働の、偉大な生産的能力の、この劃期的な発見からなのである。」と、ミックは指摘し、このよ  
うな発見をしめす一例として、『おとろえたブリタニア』(Britania languens, 1680) からつぎの一節を引用してい  
る。すなわち、「人民は……ほんとうに、もっとも主要で基本的で貴重な商品であり、それからあらゆる種類の、  
製造品、船舶、財産、占領地、および確固たる領土が、ひきだされうるのだ。」<sup>(23)</sup>

この貴重な商品すなわち労働力は、とくに製造業に投入されれば、国民に豊富な財貨をあたえるのみならず、  
その雇主にすくなくならぬ利潤をあたえうる。財産のこの新しい源の開発に、関心をもった人々は、次第に労働を  
等質で無差別なものと考えはじめた。たとえば、つぎのようにいわれている。「このように投下された人民の勞  
働は、世界の財産を集中させ、どんな国民でも驚異的な富の持主たらしめるにちがいない。」あるいはまた、「わ  
れわれの動産は、われわれの人民の労働と勤勉に、その起源をもったし、その増大を負うにちがいない。」<sup>(24)</sup>

古典経済学は、アダム・スミスが『国富論』の冒頭でのべた思想、すなわち「すべての国民の年々の労働は、  
その国民が年々消費する生活の必需品と便宜品とを、本源的に供給する資源である。」<sup>(25)</sup>を、出発点とした。スミ  
スが、商人や農民や職人の労働についてはなく、労働一般について語っていることに、注目すべきである。こ  
の新しい概念の基礎をなす態度は、いま考察しつづつある時期に形づくられたのである。「一般的抽象的人間労働  
が、徐々に、生産における一次的普遍的費用要素として、すなわち国民的繁栄(と個人の利潤)が窮極的に依存  
するところの、産出と投入の価値差額の基本的原因として、認識されはじめる。」<sup>(26)</sup>剰余価値の発生を流通過程に  
もとめた重商主義的見解にかわって、資本制生産の成長にともなう、剰余価値の源泉は生産過程にみいだされ、  
それと同時に価値論成立の地盤がきずかれたのである。

- (20) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, SS. 752-753. 訳、一〇九三—一九四ページ、参照。
- (21) Meek, *ibid.*, p. 19. 訳、一二ページ。
- (22) *Ibid.*, p. 20. 訳、一三ページ。
- (23) *Britannia Languages, Early English Tracts on Commerce*, p. 458. 編者マカロックが、本書の著者はしばしばウィリアム・ペティだといわれているが、疑わしいとのべている (P. x) ので、ミークの翻訳者がペティと断定されている (訳、一三ページ) のは、なぜかわからなく。
- (24) 本書の文章は *Britannia Languages* の、あの文章は Pollexfen, *Of Trade*, (1700) のもの。ともし、E. S. Furniss, *The Position of the Labourer in a System of Nationalism*, p. 17, 19; 49 引用。
- (25) A. Smith, *The Wealth of Nations*, edited by E. Cannan, Vol. I, p. 1. 内兵衛訳、岩波文庫 (一、一五ページ)。
- (26) Meek, *ibid.*, p. 20. 訳、一三ページ。

この時代の経済学者が、労働にこの独特の地位をあたえたということは、しかしながら、彼らがすでに労働価値論をとっていたということを意味しない。この時代には、労働が「この世でわれわれが享受する物の価値のもっとも大きな部分をつくりだす。」<sup>(27)</sup> とか、労働は「富の原因」であり、「富の源泉」であるとかいうような意味の多くの叙述がおこなわれた。しかしのちに考察する一、二の卓越した例外をのぞいて、価値論の定式化はまだみられなかった。多くのばあいには、それはただ、資本主義的基礎で、とくに製造業において組織された、「自由」な労働が、「世界の財産を集中させ」うることを意味した。これらの叙述が、それ以上のことを意味するばあいには、それは、ミークが指摘しているように、二つのまったく異なったことからの、一方または双方を意味したのである。<sup>(28)</sup>

第一に、それはしばしば、商品の使用価値または効用が、主として労働の創造物であることを意味した。「労働」が「すべてのものに価値のちがいをあたえる」のは、どのようにしてであるかについてのジョン・ロック (John Locke) の有名な議論は、この種類にぞくする。彼はいう。「わたしはおもうのだが、人間の生活に有用な大地の生産物のうちで、十分の九までは労働の成果であるといつても、それはきわめて控え目な算定にすぎないだろう。それどころか、もしわれわれが、自分たちが使用する物を正しく評価して、それぞれの費用のうち、どれだけが純粋に自然に負うものであり、どれだけが労働に負うものであるかを計算するならば、ほとんどすべての物において、百分の九十九までがまったく労働に帰せられるべきであることが、わかるであろう。」<sup>(29)</sup>ここでロックは、ある商品に、交換において他の諸商品を支配する力をあたえる、労働一般の能力(≡抽象的労働)についてはなく、さまざまの使用価値をつくり出す特定種類の労働の力(≡具体的労働)について考えているようである。<sup>(30)</sup>ロックが使用価値ではなくて価値について語るばあいには、彼は、商品の価値が、その販路(vent)<sup>(32)</sup>とその量との関係によって決定され、変動するものとみる。<sup>(31)</sup>それは流通論的な需要供給説の一種であつて、労働価値論とは無縁なものである。

(27) John Locke, *Two Treatises of Government*, 1690, Everyman's Library, p. 137. 鈴木秀勇訳、世界大思想全集、七六ページ。

(28) Meek, *ibid.*, pp. 20-21. 訳、一四ページ。

(29) Locke, *ibid.*, p. 136. 訳、七五ページ。

(30) Meek, *ibid.*, p. 21. 訳、一五ページ。

(31) 「物の価値を正當に評価しようとおもう人は、その販路に比してその量を考えねばならぬ。けだしこれのみが価格を規制するから。物の価値は、それ自身と比較しまた恒常的尺度と比較して、量が販路に比して、小さいときは大きい。しかしそれを他物と比較するさいには、その物の量と販路とが、価値の計算において、これまた考慮されねばならぬ。」(Locke,

Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money, 1692, p.

20.) (平瀬、前掲書、二一七—八ページ、参照。)

(32) 平瀬氏は、これを、ロックの「価値数量説」と名づけられている。(同右、二一七ページ。)

第二に、ミークによれば、「その当時、労働を価値と富の源泉として説明した人々は、しばしばただ、製造された商品の生産費において、賃銀費が通常もつとも重要な要素であることを、いおうとしたにすぎなかつた。」<sup>(33)</sup>労働者は、彼らが加工する原料に、少くとも彼らの労働〔力〕の価値に等しい価値額をつけ加え、その価値は原料の価値にくらべてきわめて大きかつたので、完成商品の価値が、ほとんどまったくその生産に使用された労働〔力〕の価値からなると、考える傾向が生じた。古典派以降の経済学者にとっては、商品は、その生産が継続されるためには、賃銀とともに平均利潤をもふくむ価格で、売られなければならないことは、公理のようにおもわれる。しかし十七世紀においては、事情が異なつていた。多かれ少かれ独立的な直接生産者によつて仕上げらるべき原料を、前貸しする商人にとっては、少くとも商品の原価はほとんどまったく賃銀からなるものとおもわれたし、それが市場で売られる実際の価格も——競争による利潤の平均化につれて——賃銀費にかなり正しく比例したにちがいない。また卒伍から身をおこして事業をはじめた親方職人にとつても、商品の価格は——彼が利潤を自分の労働にたいする高級賃銀とみなしがちであつたから——、ほとんどまったく賃銀費に解消するものと

おもわれたのである。<sup>(34)</sup>

要するに、この時代の経済学者たちが、価値の「源泉」または「原因」としての労働について語ったとき、彼らが通常意味したことは、交換価値が主として賃銀費に依存するということ、あるいは、労働は、商品の使用価値を増大することによって、間接的に交換価値をつくり出すということ、にすぎなかった。これらの観念は、まだもちろん労働価値論というふうなものではなく、ただ「経済学者たちが、労働価値論の方向にむかいはじめている、ということ」をしめすものにすぎなかった。<sup>(35)</sup>

(33) Meek, *ibid.*, p. 22. 訳、一六ページ。

(34) *Ibid.*, pp. 22-23. 訳、一六一―一七ページ。

(35) *Ibid.*, pp. 23-24. 訳、一八ページ。

#### 四

古典派的な価値＝価格論の発展におけるつぎの大きな訓期は、十八世紀の中ごろ、資本の利潤が、新しい種類の階級所得として、次第にあらわれ、みとめられたことのうち、みいだされる。この資本の利潤の出現は、もとよりたんに概念的な事象ではなくて、歴史的な事象でもあった。いままで土地所有や貸付資本に圧倒されていた産業資本の抬頭が、いまや経済学者の眼にはつきり映るほどになったということが、土地の地代や貨幣の利子とならんで、資本の利潤を独立の階級所得としてとらえることを可能にしたのであり、また商業資本にたいする産業資本の比重の増大が、「讓渡利潤」としての利潤の源泉の把握から、「賃労働の雇用への資本の使用と、独

特にむすびついた所得<sup>(36)</sup>」としてのその認識への前進を、可能にしたのである。

もつとも、資本の利潤を、経済学者たちが把握しうるには、いくつかの障碍をのりこえねばならなかった。ミークの整理にしたがっていえば、その障碍というのはつぎの三つであった。第一に、貨幣の利子と土地の地代から、利潤がはつきり分化しなければならなかった。利潤は、資本額（賃労働の雇用にもちいられた貨幣額）に、かなり正しく比例するというかぎりでは、土地の購入に投じられた貨幣額に比例する地代および貸付けられた貨幣額に比例する利子、に類似していた<sup>(37)</sup>。

まず、貨幣（すなわち蓄蔵物としての貨幣）と資本（すなわち収入をえるために利用される貨幣）との区別が、幾人かの経済学者によって認識されはじめた<sup>(38)</sup>。つづいて、いっそう重要な区別が、「貸しだされた土地」や「利子つき貨幣」のばあいのごとく、受動的に使用された資本と、「事業用の財貨」のばあいのごとく、能動的に使用された資本とのあいだに、なされるにいたった。資本を受動的に使用する人々は、正常なばあいには、通常率の利子またはその等価をうけとるにすぎないであろうが、資本を「事業」において能動的に使用する人々は、正常なばあいには、通常率の利子をこえる純利得すなわち「利潤」をもうけるであろう、ということがあきらかになった。ここに派生的な所得形態として利子についての古典概念が展開されるための道がひらかれたのであって、利子は総利潤から支払われ、それによって規制されるものであった<sup>(39)</sup>。この古典的利子論は、マッシー（一七五〇年）およびヒューム（一七五二年）において確立された<sup>(40)</sup>。

(36) Meek, *ibid.*, p. 24. 訳、一九ページ。

(37) *Ibid.*, p. 25. 訳、一九ページ。

(38) ノースは一六九一年に、つぎのように書いた。「なにびとも、その財産をすべて、貨幣や金銀器その他のかたちで手許においておくことによって、そうでないはいより富裕になるのではなくて、反対にそのために彼はより貧しくなるのである。その財産が、貸しだされた土地、利子つきの貨幣、または事業用の財貨のいずれかのかたちで、増加しつつある状態にあるときに、その人はもともと富んでゐるのである。」(Dudley North, Discourses upon Trade, Tracts on Commerce, p. 525, 久保芳和訳『交易論』、一二二ページ。)

(39) Meek, *ibid.*, p. 25, 訳、二〇二ページ。

(40) マシーは、利子率が貨幣量によって規定されるというペティやロックの思想を否定し、「利子は利潤にもとづき」、「自然利子率は産業利潤によつて支配される」(Joseph Massie An Essay on the Governing of the natural Rate of Interest, 1750, reprinted by Hollander, p. 48.) ことを主張してゐる。またヒュームは、利子率は、本質的には「商業かゝる生活の利潤」(David Hume, Essays, Part II, Of Interest, 1852, Writings on Economics, ed. by Rotwein, p. 49.) の率によつて定まると主張してゐる。(Cf. K. Marx, Theorien über den Mehrwert, I. Teil, Institute für Marxismus-Leninismus, SS. 337-340, 長谷部文雄訳、五四四—五四八ページ。)

第二に、利潤が賃銀からはつきり分化しなければならなかつた。資本制生産が、工業と農業において発展するにつれて、資本の能動的な使用に共通な本質的特徴が、賃労働の雇用であることを認識するための、したがつて労資の関係がうみだす、新しい型の階級所得としての利潤を想定するための、客観的な条件が次第に形づくられてきた。しかしこの時代には、雇主の多くは、直接生産者の隊列から身をおこし、まだ多かれ少かれ生産過程の活動に参加していた。したがつて彼らは、支払つた費用と、その商品にたいして受取つた価格との差額を、彼らを提供した——しばしばきわめて貧弱な——資本の利潤としてよりも、むしろ彼らの個人的努力の高級賃銀とし

てみることを固執した。雇主がその仕事を監督的な機能にかざるようになってもまだ、彼らの報酬を、監督賃銀とよぶことが、もつともらしくおもわれたのである。<sup>(41)</sup>

最後に、平均利潤率の概念が、樹立されねばならなかった。資財の利潤が、資本の量にたいして——たまたまそれがどの領域で使われようとも——、一定の比率をもつものとみなされるようになりうるには、資本制生産様式によって支配される領域がかなり拡大され、国内商業および外国貿易の双方における競争が一応自由になり、資本が、さまざまな場所や職種のあいだを、比較的動きやすくなる、ということがあきらかに必要であった。<sup>(42)</sup> 平均利潤の思想は、前述のマッシーにみられ、その形成機構——資本・労働の可動性——はヒュームによって認識されはじめた。<sup>(43)</sup> そして両者が後述のハリスにおいて統一され、スミスよりカードゥへと継承・発展されてゆくのである。

(41) Meek, *ibid.*, p. 26. 訳、ニニヤーン。

(42) *Ibid.*, pp. 26-27. 訳、ニニヤーン。

(43) マッシーには「通常利潤」(common profit) (Mossie, *ibid.*, p. 47) という概念があるが、その形成機構は把握されていない。ヒュームには平均利潤の思想はみられないが、資本・労働の可動性は、つぎのように把握されている。「商業の発展した国の」利益は、ある程度、それが発展していないで、金銀の豊富でない国の、労働の低価格によって相殺される。それゆえに製造は徐々にその場所を移し、すで豊かにしてやった国や地方を去って、食料と労働の安価によって誘われる他の場所へ飛ぶ。」(Hume, *ibid.*, *Of money, Writings on Economics*, pp. 34-35.) (平瀬、前掲書、三五三、三六五ページ、参照。)

これらの前提条件の成熟の理論的産物が、「自然価格」(natural price)の古典的概念であった。競争的条件

のもとでは、諸商品は、長期においては、正常または自然率の利潤をふくむ自然価格で売れる傾向をもつということが、次第にみとめられるようになった。この概念の完全な成立はアダム・スミスを待たねばならなかったが、その思想的先駆者としてもっとも重要なものは、カンティロンおよびハリスである。

一七三〇年ごろに書かれ、一七五五年に出版されたカンティロン(Richard Cailion, 1685 ころ-1734)の『商業一般の性質論』(Essai sur la Nature du Commerce en général.)は、経済学にかんする最初の体系的な書物である。カンティロンは、「土地はそこからすべて富が生れてる源泉または素材であり、人間の労働は富を生産する形式である。そして富そのものは、生活の必需品、便宜品および快楽品にはかならない。」<sup>(44)</sup>ということばや、「物一般の……内在価値 (la valeur intrinsèque) は、その生産にいりこむ土地および労働の尺度である。」<sup>(45)</sup>とすることはから察せられるように、ペティとおなじように、価値の源泉にかんする二元論的見解をしめしている。(なお彼も、ペティと同様に、土地と労働との「等価関係」を探究している<sup>(46)</sup>)ところで、「実際にこの内在価値をもつ多くの物品が、市場においてその価値にしたがって売られないということが、しばしばおこる。それは、人々の気質や嗜好に、また彼らの消費によるであろう。」<sup>(47)</sup>一国において物品の生産とその消費とをつりあわせることは不可能であるから、「市場価格」は「日々の変動と不断の高低」をまねがれないのである。しかしながら、「よく整った社会においては、消費がかなり一定不変な物品〔の市場価格〕は、その内在価値から大してはなれるものではない<sup>(48)</sup>。」

ここでは、カンティロンは、市場価格を内在価値に等しからしめる機構についてはなにもいっていないし、資本の利潤は、内在価値の構成要素としてふくませられてはいない。しかし別の個所では、彼は、正常率の利潤を

ふくむ自然価格の観念にかなりちがっている。すなわち、「企業家」が「一国においてその顧客または消費者にみずから比例する」やり方について語っている、つぎの文章においてはそうである。「一つの都市または街路に、帽子を買う人々の数にくらべて帽子屋が多すぎるならば、もつとも客の少い何軒かが破産するにちがいない。もしそれが少なすぎるならば、それは有利な事業となり、新しい帽子屋がそこに店をひらくであろう。このようにして、あらゆる種類の企業家は、一国においてその危険に適応するのである。」<sup>(49)</sup>要するに、市場価格は需要と供給とが量的に一致しないときには変動をまぬがれないが、その変動機構をつうじて結局は需要供給が一致することになり、市場価格と内在価値とが一致する、というのがカンティロンの論理であつて、<sup>(50)</sup>あとの文章では、その変動機構、いいかえれば利潤率均等の機構が、漠然とではあるがつかまれているのである。

(44) Richard Cantillon, *Essai sur la Nature du Commerce en général*, reprinted in 1953, p. 1. 戸田正雄訳、カンティロン『商業論』、一ページ。

(45) *Ibid.*, p. 15. 訳、二一ページ。カンティロンでは、*valeur intrinsèque* は「生産にいらこむ土地と労働の量」をあらわす、すなわち生産費にもとづく価値の意味に転化していることに注意。

(46) *Ibid.*, p. 19. 訳、二七ページ。

(47) *Ibid.*, p. 17. 訳、二三ページ。

(48) *Ibid.*, p. 18. 訳、二四ページ。

(49) *Ibid.*, p. 27. 訳、四四ページ。

(50) 平瀬、前掲書、二七八ページ。平瀬氏はこれを、「価値＝価格一致にかんするカンティオン命題」と名づけて、「古典経済学の筋骨体系の二」とされている。（同右、二七五ページ。）

ハリス (Joseph Harris An Essay upon Money and Coins, 1757.) は、カンティロンの影響をうけて、つぎのようにのべている。「品物は一般に、人々の必要をみたすにあつての、それらの眞の効用にしたがつてではなく、むしろそれらを生産するに必要な土地と労働と熟練とに比例して、価値づけられる。ほぼこの比率にしたがつて、品物あるいは商品は、相互に交換されるのであり、いまいつた尺度によつて、たいていの品物の内在価値 (intrinsic value) は、主として測定される。……人々のさまざまな必要と欲望とは、彼ら自身の商品を、彼らがそれと交換にえたいとおもう品物に投下された労働と熟練とに、比例した率で手ばなさせるのである。もし彼らが市場の法則にしたがつておもうとしないならば、彼らの財貨は彼らの手中にのこるであろう。そしてもし最初に一つの事業<sup>トト</sup>が、熟練と労働とあらゆる種類の危険とをともに考慮にいれて、他の事業より有利であるとすれば、より多くの人々がその職業<sup>ゴク</sup>にはいりこむだろうし、彼らは競争して互いに他人より安く売ろうとし、ついにその職業の大きな利潤は、他のものと等しいところ (a par) までひき下げられる。」<sup>(51)</sup>ここでは、資本・労働の可動性<sup>(51)</sup>がはつきりとつかまれ、それから平均利潤が——平均利潤という用語はないが——みちびきだされている。マッシーとヒュームとの達成 (すなわち、平均利潤の思想とその形成機構の認識と) が、ここに統一された。しかし、その平均利潤をふくむ自然価格の概念は、ハリスにおいてはまだできあがつていなかったし、したがつてまた自然価格が市場価格の変動の中心をなすというふう<sup>(51)</sup>に、カンティロンの思想 (需要供給一致点での価値<sup>(51)</sup>—価格一致) を発展的にうけつぐこともできなかった。その仕事は、アダム・スミスを待たねばならなかったのである。

(15) Joseph Harris, An Essay upon Money and Coins, p. 5, 9, Quoted Meek, *ibid.*, p. 29. 訳、二五—二六ページ。

このようにして、また不完全ながらも、「正常の率における利潤が、長期的競争価格の構成要素としてそのな

かにふくませられたことの主要な意味は、それによって古典経済学者が、この価格の水準が『恣意的』要素に依存するのではなく、『法則にしたがう』ものであることを証明しえたところにある。」と、ミークはいふ。いままでは、商品の価格は、その「原価」(prime cost)をある増加分（＝「利得」）だけうわまわり、その増加分は、個々のばあいには、供給と需要の状態におうじて変化するであろうということ（＝「需要供給説」）しかいえなかつた。それは、（特定の時と所において売買される特定の商品の価格の決定というような、）きわめて限られた範囲の有効性しかもちえない理論であつた。しかるにいまや、正常なまたは自然の利潤率という現象とその認識が、広汎にあらわれたことによつて、はるかに有効な一般的叙述が可能になつた。すなわち、商品は、競争的条件のもとでは、「原価」に「自然率」の利潤を加えたものに等しい価格で売れるのであるといふようになった。利潤の自然率が獲得されている状態は、供給が需要と一致した均衡状態と考えられ、そのときに諸商品が売られる価格が、それらの「自然価格」と定義された。こうなると市場価格は、任意のときに、その自然価格からはなれているかもしれないが、それにむかつて「つねにひきよせられている」ものとみなされえた。このように「生産費」(cost of production)原理は、価格を法則にしたがうものにしたのである。<sup>(52)</sup>

(52) Meek, *ibid.*, pp. 31-32. 訳、二八—二九ページ。

## 五

古典経済学者はなぜ、『生産費』価値論に満足してそこにとどまらなかつたのか、長期的競争価格が、正常率の利潤をふくむ生産費に等しいことをしめしておいて、そのあとで彼らはなぜ、生産費自体の決定要素を探し求

めたのか。ミークによれば、「その答えは、基本的には、生産費説が必然的に、『自然価格』の構成要素をあたえられた独立の要素として想定しなければならぬという、事実のうちによこたわっている。」資本制の基礎において生産され、競争的条件において販売される一群の商品の平均価格を決定するためには、自然価格論で十分であった。しかし資本制生産様式が全社会をおおうようになったとき、その社会の商品全体の長期における平均価格を問題にするさいには、自然価格の構成要素——とくに賃銀水準と利潤率——はもはや独立の決定要素とみなすことはできない。なぜなら、それらの要素自体が商品の価値に依存するからである。したがって資本制生産の全機構を分析しようとする——「諸国民の富の性質と原因」をというような広範な問題を研究しようとする——経済学は、商品の価値と同時に生産諸要素——とくに労働力と資本——の価値をも決定しようとするような、新しい価値原理をもたねばならない。古典経済学者が、そのことを本能的に覚ったのは、完全に正しかったのである。<sup>(53)</sup>

「もう一つの理由」は、「もっと特殊な性質の」ものであった、とミークはいう。すなわち、それは資本の利潤に関連するものである。利潤は、生産的努力にたいする報酬としてではなく、使用された資本の大きさに比例する剰余として、また流通過程で原価に追加された増加分としてではなく、生産過程で発生した原価をこえる剰余として、あらわれはじめた。この利潤は、古典経済学者にとつては、富の増大への鍵と考えられた資本の蓄積の、源泉としてきわめて重要なものであった。そこで価値論は、利潤の水準自体が価値の決定要素の一つであるようなものであつてはならず、利潤の水準がどうして決定されるかを説明しようるものでなければならなかつた。いいかえれば、「生産における産出と投入との量的な価値差額（それが利潤としてあらわれた）の、発生と伝統とを説明しようるような、新しい価値原理が展開されるべきであつた。<sup>(54)</sup>」

(53) Meek, *ibid.*, pp. 32-33. 訳、二九—三〇ページ。なお Dobb, *ibid.*, pp. 8-10. 訳、八一—九二ページ参照。ドップは、「価値論の本質的条件は、それが商品価値の問題だけでなく、分配の問題をも解決し（すなわち、労働力、資本、および土地の価格を決定し）なければならない、という点にある。」（p. 9. 訳、ページ）といているが、それは剰余価値の把握における労働価値論の優越性を指摘したものである。

(54) Meek, *ibid.*, p. 33. 訳、三〇—三一ページ。労働価値論が「剰余の概念にならぬの意味をもたせ」うるどころの唯一の価値論であるということは、ドップがはじめて強調したところである。（Dobb, *ibid.*, p. 22. 訳、二〇ページ）

たしかにそのとおりであろう。ただつけくわえておきたいことは、自然価格論⇨生産費説が、価格の理論であつて、価値の理論ではないということである。生産諸要素（費消資本と労働力）の価値プラス平均利潤は生産価格であつて、商品価値とは量的に相違する。しかるにその自然価格が、古典経済学（スミスおよびリカード）においてさえ、価値と混同されたところに、本来価格の理論である生産費説が、価値の理論として通用した理由があつた。しかしそれは、価値よりもいっそう現象的な資本制生産関係の反映たる生産価格の把握であつて、資本制生産のもつとも基礎・抽象的な関係を表現する商品価値の認識にまで深化（⇨下向）されなければならない。そこに経済学の基礎原理としての労働価値論成立の意義があつたのである。

## 六

労働価値論の源流をさぐるためには、われわれは、十七世紀後半のイギリスの偉大な経済学者ウィリアム・ペティ（Sir William Petty, 1623-87）にまで、さかのぼらねばならぬ。彼こそ、さきにみたところの、労働が富と価

値との「源泉」または「原因」であるという当時の一般的な考え方——それは資本主義体制が、封建的秩序に抗して、広い意味の働く者の立場から自己を形成してきたことのあらわれであったが、——を深化し、理論化して、労働価値論をつくりだした、ほとんど唯一の人であった。それゆえにこそ、マルクスは彼を、「近代経済学の建設者」とよび、「もともと天才的でもっとも独創的な経済学者<sup>(56)</sup>」と評価し、また「古典経済学」はイギリスでは「ペティにはじまる<sup>(57)</sup>」とみなしたのである。

(55) 白杉庄一郎『経済学史概説』五四ページ、参照。

(56) Engels, *Anti-Dühring*, S. 283, 286. マルクス＝エンゲルス選集、第一四巻、四〇〇、四〇三ページ。(これらのごとは、*マルクス執筆の第二編第一〇章『批判的学史』*より)にある。)

(57) Marx, *zur Kritik*, S. 39. 訳、四一ページ。

一六二三年、ハムブシャーの貧しい織元の子に生まれ、オランダとフランスで医学を学んだ、ペティは、ピューリタン革命が議会がわの勝利におわったころ(一六四八年)、オックスフォード大学の解剖学教授となり、ついで(一六五二年)クロムウェルのアイルランド派遣軍の軍医として、反徒からの没収地の測量(Down Survey)。分配の事業にあたり(一六五四―五八年)、財産と地位をうるとともに、自然科学の方法を社会の分析に適用する基礎を確立し、王政復古(一六六〇年)のち社会経済(Body Politick)の研究にむかって、一六六二年『租税および貢納論』(A Treatise of Taxes and Contributions)を公刊したが、労働価値論は本書のうちにはじめて定式化されたのである。

『租税貢納論』は、当時イングランドにとって最大の難問であった財政問題をとりあつかい、公収入の性質・

標準およびその徴収方法を論じたものであって、第一章は経費論、第三章から第五章までは収入論を形づくっているが、労働価値論は、主として、そのうちの収益税を論じた第四章および第五章の附論としてのべられているのである。

公収入の問題にかんするペティの中心的な主張は、租税負担の公平ということであるが、それは具体的にいえば、租税が各人の富にたいして比例的に課せられるべきであるということにほかならないのであって、そのためには人民の数・産業・富について知らねばならない、とされている（第三章）。そして各種の公収入のうち、まず当時重要な直接税であつた地租（および家屋賃料税）がとりあげられている（第四章）。しかるにペティによれば、地代に租税がかげられると、地代が確定している地主は税額だけ地代が減り、そのちに土地を貸す人はそれだけ地代を引上げるであろうから、それぞれの地主と借地農にとつて不平等が生ずるであろう、といふ<sup>(58)</sup>。そこで彼は、地代に租税がかげられるとなぜこのような不平等が生じるのかという問題を究明するために、租税の問題をはなれて、（土地賃料、家屋賃料および貨幣賃料といふ）賃料（Rent）一般の「神秘的な性質」すなわちその本質を説明しようとする<sup>(59)</sup>。

かくして地代の本質が、つぎのように闡明される。「かりにある人が、自分自身の手で一定面積の土地に穀物を栽培することができるでしょう。すなわち、この土地の耕作が必要としているだけ、掘り、またはすきかえし、まぐわをかけ、除草し、刈りいれ、家にとりいれ、脱穀し、そしてふるい分けることができるでしょう。しかもそのうえに、この土地にまくだけの種子をもっていたでしょう。わたしはいう、この人が自分の収穫高から自分の種子をさしひき、またおなじように、自分の食へたものと、衣類その他の自然的必需品と交換に他人にあ

たえたものとをさしひいたとき、なおそこにくる穀物は、その年におけるその土地の自然的な真実の地代である。そしてこのような七年間の、あるいはむしろ凶作と豊作とが循環して周期をつくりあげている幾年かの平均が、穀物での、その土地の通常の地代をなすものである。」<sup>(60)</sup>と。すなわち、ペティは、地代を、一定面積の土地から一定時間中に耕作者自身の労働によってえられた(種子および耕作者の生活資料をこえる)剰余生産物とみなしているのである。

だが彼は、このような現物地代の規定にとどまらず、すすんで貨幣地代をも解明している。「しかしさらにすすんで、副次的な問題ではあるが、この穀物すなわち地代がどれだけのイングランド貨幣に値いするであろうか。わたしは答える、それは別のひとりの人がおなじ期間中、かりに貨幣の生産・製造に専心従事したとして、自分の費したもの以上に蓄ええただけの貨幣である、と。すなわち別の人が、銀が存在する地方へゆき、そこで銀を採掘し、精練し、それをもうひとりの人が穀物を栽培しているところへもつてきて、貨幣に鑄造する等々のことをするとしよう。さらにこの人は、銀のために働いている期間中、自分の暮しに必要な食物も集め、衣服も自分で手にいれる等々のことをするとしよう。わたしはいう、ひとりの人の銀は、もうひとりの穀物と価値が等しいと評価されねばならない。前者は多分二十オンス、後者は二十ブッシェルであろうが、このことから、この穀物一ブッシェルの価格は銀一オンスであるということになるのである、と。」<sup>(61)</sup>これによって地代は、生産過程における人間労働の所産としての剰余価値であることが、明確にされたのであるが、この剰余価値を規定する必要から、おなじ期間中に生産された銀と穀物と(における剰余生産物)が「等価値」であるという価値論がみちびきだされ、そしてこの価値は労働時間によって決定されるものとみなされているのである。

ペティの労働価値論のいつそう明白な定式化はあとにみられるが、ここでのちの議論のために、彼の剰余価値論の特徴を指摘しておきたい。それは、第一に、地代が剰余価値の本来的形態とみなされ、貨幣賃料すなわち利子はその派生的形態と考えられていること、そして独立の範疇としての利潤は知られていなかったことである。第二に、剰余価値を問題にしなから、賃労働がまったく欠如していることである。すなわち、生産はすべて独立生産者（独立自営農民その他の単純商品生産者）によって営まれるものとみなされている。これらは、エンクロージユアとマニユファクチュアとのある程度の発展をみたとはいえ、なお生産が農業においても製造業においても圧倒的に多かれ少かれ独立的な小生産者によって営まれ、また土地所有と貸付資本との比重がなおきわめて大きく農業と工業における産業資本の成長がまだ顕著でなかった、十七世紀中ごろの現実を反映したものであろう。

(98) William Petty, *A Treatise of Taxes and Contributions, The Economic Writings of Sir William Petty*, edited by C. H. Hull, Vol. I, pp. 39-40. 大内兵衛・松川七郎訳、ペティ『租税貢納論』（岩波文庫）、七一ページ。

(95) Petty, *ibid.*, p. 42. 大内・松川訳、七六ページ。

なお、松川七郎「労働価値説の生成にかんする一考察——ペティのダウン・サーヴェイと『租税貢納論』——」（『経済研究』第三卷第三号、一九五二年七月、二〇三ページ、参照。

(99) *Ibid.*, p. 43. 訳、七六一七七一ページ。

(91) *Ibid.*, p. 43. 訳、七七一七七一ページ。

ペティは、右の同一時間中の労働によってえられる穀物と銀とにおける剰余生産物の等置は、その生産における技術的な難易にもかかわらずおこなわれうること、すなわちそれは長期間における社会平均としての等価関係であることをいい、<sup>(92)</sup>そしてこのような等置が価値関係の基礎であるとす。「わたしはいう、こうすることが

もろもろの価値を均等化することや平衡化することの基礎である、と。とはいえ、わたしは、この基礎のうえにあるもろもろの上層建築および慣習には、実のところ多くの様相があり、また大いに錯雑しているといわざるをえないが、その点は後述する。<sup>(63)</sup>と。すなわち彼はここで、価値は同等な人間労働によって規定されると考え、この基礎的關係とその展開としての現実の価格關係との区別に気づいていたとおもわれる。

(22) *Ibid.*, p. 43. 訳、七七ページ。

(23) *Ibid.*, p. 44. 訳、七八ページ。

## 七

つぎにペティは、「諸物を測定する」尺度、すなわち価値の標準ないし尺度の問題にうつり、「世間では、金および銀で——しかし主として後者で——諸物を測定」しているが、銀の「価格は騰落する」から、なにか他の「自然的標準および尺度」をもとめるべきである、という。<sup>(64)</sup>そしてこの価値の自然的標準ないし尺度を、「土地および労働」であるとし、両者のあいだに「自然的等価關係」がみいだされうるとする。すなわちいう。イングランドでは、金や銀は、ポンド・シリリング・ペンスというような種々の名称でよばれている。「しかしこの問題についてわたしのいいたいことは、すべての物は、二つの自然的単位名称、すなわち土地および労働によって価値づけられねばならない、ということである。すなわち、われわれは一隻の船または一枚の上衣がこれこれの面積の土地、ならびにそれは別のこれこれの量の労働に値いするといふべきなのである。なぜなら、船も上衣もともに、土地およびそこに投じられた人間の労働の創造物であるからである。このことが本当であれば、われわれ

は土地と労働とのあいだに一つの自然的等価関係(a natural Par)を発見したことを喜ぶべきである。というのはそれによって、われわれはこれら両者のいずれか一方だけで、双方によってとおなじように、またそれよりもよく、価値を表現することができ、ペンスをポンドに還元するのとおなじようにたやすく確実に、その一方を他方に還元することができるであろうからである。<sup>(65)</sup>

これは、人間の労働を価値の源泉とみなすさきの見解とは異なつた、二元論的な価値観であるといわねばならない。もつともそれは、価値の実体あるいは源泉をではなくて、その標準ないし尺度を問題にしているのではあるが。ペティが、労働のほかは土地をも、価値の尺度と考へたことは、あきらかに価値と富(使用価値)との混同にはかならない。ペティの根本思想——それはおそらく彼以前から存在したものであろうが——をしめす有名なことば、「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素である<sup>(66)</sup>」は、使用価値が自然素材と人間の労働との結合であることを語つたものとして正しけれども、それから土地と労働とが価値の尺度または単位であるという議論をひきだすことは誤りである。価値はなんらの自然素材をもふくまない。もつともこのような見解は、ある意味では、ペティからミスにいたる一世紀間のいくたの経済学者——ロック、カンティロン、ハリスおよびケネー、その他の人々——に共通の思想的風土ともいふべきものでもあつた。<sup>(67)</sup>だがこの混同は、ペティにおいては、とくに、価値すなわち「自然価格」が、のちにみるように、ただちに貨幣すなわち銀において相対的に表現されたものとして、価値 $\parallel$ 交換価値 $\parallel$ 価格が同一視されていたことと、<sup>(68)</sup>関係があろう。いうまでもなく、貨幣 $\parallel$ 銀の生産には、労働のみならず自然も参加するからである。

(59) Ibid., pp. 44-45. 訳、七九ページ。

(60) Ibid., p. 68. 訳、一一九ページ。

(67) 平瀬、前掲書、一〇八一—二一ページ参照。平瀬氏はこのような見解を「土地—労働理論」と名づけて、さらに多くの人名をあげられているが、問題は価値視点をもつものについてのみ存在するのである。

(68) 本論文三六ページをみよ。

しかしそれだけではない。土地および労働を価値尺度とするベティの見解は、彼の理論の生成の秘密を物語っているようである。さきにみたように、ベティの社会経済にかんする知識は、一八五五—五六年の 아일랜드 におけるダウン・サーヴェイすなわち土地測量とそれにつづく一八五六—五八年の没収地分配事業の過程において獲得されたものとおもわれるが、彼がみずからその体験を語っているところの『アイルランドの政治的解剖』(The Political Anatomy of Ireland, 1672, 「執筆」, 1691. 「刊行」)の第九章<sup>(69)</sup>には、土地と労働との等価関係のつぎのような基礎づけがみいだされる。

すなわち、彼は、「経済学におけるもつとも重要な問題」は、「あらゆるものの価値を、「土地と労働との両者のうちの」いづれか一方のみによって表現するために、どのようにして土地と労働とのあいだに同価・均等の関係(Par and Equation)をつくりあげるか、という問題」であるとし、これをつぎのように説明している。いま二エーカーの圃にこまれた土地に放牧された仔牛が、十二カ月間にその肉が百ポンドだけ重くなったとし、それが五十日分の食物に相当すれば、それはこの土地の一カ年の地代である。そしてもし人間がこの土地を耕すことによって、一年間に六十日分以上の食物を生産しうるならば、(さしひき十日分以上の)「食物のこの超過分が人間

の賃銀である。」かくして「土地と労働とはともに、日々の食物の数量によって表現される。」「若干の人々が他の人々よりもいつそう多く食へるであろう、ということとは、重要ではない。われわれは日々の食物を、あらゆる種類と大きさの百人のものが、生き、労働し、そして子供を生み育てるために、食へるであろうものの百分の一と解するからである。」<sup>(70)</sup>

ここではじめは、労働の価値が人間の生産した食物の数量によってはかられるとされていたのに、のちにはそれが労働者が消費する食物の平均にかわってしまっている。賃銀は、はじめは労働者が生産した全労働生産物であったのが、のちには労働者の生存に必要な生活資料によって規定されている。<sup>(71)</sup>そしてそれが価値の尺度とされているのである。「それゆえ、ひとりの成人の、日々の労働ではなくて、平均的な日々の食物が、価値の共通の尺度である。」<sup>(72)</sup>

はじめの部分も、労働価値論としてはかなりあいまいなものであるが、あとの部分は、賃銀（労働力の価値）によって価値が決定され測定されるという支配労働価値説への転換をしめしている。「それゆえわたしは、一戸のアイランド人の小屋を、建築者がその建築についやした日々の食物の数量によって価値づけるのである。」<sup>(73)</sup>

(69) 松川七郎、「サー・ウィリアム・ベティの生涯」、『経済研究』第二巻第一号、一九五一年一月、七〇―七一ページ、参照。

(70) Petty, *The Political Anatomy of Ireland, Economic Writings*, p. 181. 松川七郎訳、ベティ『アイアランドの政治的解剖』（岩波文庫）、一三三―一三四ページ。「」内は引用者による附加、以下同様。

(71) 平瀬巴之吉『経済学の古典と近代』、一〇一ページ、参照。

(72) Petty, *ibid.*, p. 181, 訳、一三五ページ。

(73) *Ibid.*, p. 182, 訳、一三五ページ。

それはともかく、土地と労働とを価値の尺度とみなし、両者のあいだに等価関係をみいだそうとしたことは、ペティにとつては、没収地分配事業の前提としての土地の評価を客観的におこなうという必要から、生じたものようにおもわれる。すなわち、土地の公平な分配をなしとげるためには、土地の良否および地価を合理的に決定することが必要であつたのであり、——<sup>(74)</sup>『租税貢納論』においては、地価は、つぎにみるように、地代に「購買年数」をかけることによつてもとめられているのではあるが、——土地と労働とのあいだに直接的な等価関係をみいだすことによつて、土地の価値を測定したいという欲求は、最後までペティの頭からはなれなかつたものようである。もっとも彼は、つぎにみるように、土地の価値を地代に還元し、地代を剰余労働に還元することによつて、結局土地の価値を労働に還元しているのであり、かくして「土地と労働とのあいだの等価関係」は、事実上「<sup>(75)</sup>切断」されたわけであるが。

すなわちペティは、地価が、年々の地代に一定の「購買年数」(years purchase)を乗することによつてもとめられるとする。この年数は無限数ではありえない。なぜなら、そのばあいには、一エーカーの土地は、その価値において、千エーカーの土地に等しいことになるであろうから。したがつて、なんらかの有限数が定められねばならないが、彼は、「それを、すべていっしょに生活しているひとりの五十歳の人、他のひとりの二十八歳の人、もうひとりの七歳の人、すなわち祖父、父、子が、ともに生きてゆけるであろう年数であると解する。それ以上さきの子孫のことを心配しているといえる人はあまりあるまい」そして、現在、イングランドにおいて

は、三人がひとしく生きてゆける期間を二十一年と推定し、したがって、土地の価値もまたほおなじ購買年数であると推定する。<sup>(76)</sup>

このような議論は、ペティが「貨幣賃料（Usury）の最低限は、その安全性が疑いがないときには、借りた貨幣で買えるだけの土地からあがる地代である。」<sup>(77)</sup>と云って、利子を地代から派生するものとみなしたために、地代を利子率によって資本還元することによって地価をもとめることが不可能であつたために、考へだされた巧妙な解決策である。だが、ともかくこれによって、土地の価値は事実上資本化された地代とみなされたのであり、そして地代は、さきに見たように、耕作者の労働によってえられた（種子および生活必需品をこえる）剰余生産物であり、しかもそれは同一期間中にえられた銀と等置されることによって剰余価値として、したがってまた剰余労働として、つかまれていたのであるから、結局土地の価値は労働量に還元されることになり、土地と労働という二つの価値尺度をその一方のみに還元するという課題は、前者を後者に還元することによって解決され、労働価値論が貫徹されたわけである。

(74) 松川、「労働価値論の生成に関する一考察」、二〇一ページ。

(75) Marx, *Theorien*, Bd. I, S. 325. 訳、五二六—七ページ。

(76) Petty, *Treatise of Taxes*, d. 40. 訳、八〇—八一ページ。

(77) *Ibid.*, p. 48. 訳、八五—八六ページ。

地代、地価および利子の本質にかんする以上の長い附論のうちに、ペティは本題にたちもどつて、地租負担の公平がどうすれば達せられるかを論じる。地租は「地代の一部分を徴収する」ことであるから、それは公平ならしめるためには、各単位の土地について、その地代の貨幣価値を正確に測定することが必要である。このために、彼は土地測量を提唱するのであるが、それはつぎの二段階に分れる。その第一は「土地の内在的価値 (intrinsic Value) の測量あるいは吟味<sup>(78)</sup>」であつて、これは、すべての土地を「行政上の境界」および「自然的特徴」にしたがつて、「形状、面積、位置について測量」し、同時に各単位の土地の生産物の種類と数量とを調査し、それを相互に比較することによつて、土地の生産性を測定することである。そのさい生産物の比較に「貨幣という共通の標準」をもちいてはならないとされていることによつてもわかるように、それは土地およびその生産物の数量と自然的属性の調査である。第二の測量は、「土地の付带的または偶然的 (extrinsic or accidental) 価値の測量または吟味<sup>(80)</sup>」であつて、これは生産物の価格調査であるが、それを論ずるまえに、ペティは、まず「自然価格」をつぎのように規定する。

「もしある人が、一ブッシェルの穀物を生産しうるとおなじ時間に、一オンスの銀をペルーの地中からロンドンにもつてくることができるとすれば、そのばあいには一オンスの銀は一ブッシェルの穀物の自然価格 (the natural price) である。ところでもし、新しいもつと採掘の容易な鉱山によつて、ある人がまえに一オンスをえたのおなじ程度の容易さで、二オンスの銀を獲得することができるならば、そのときには、他の事情が変化しなければ、穀物は一ブッシェルが十シリングでも、まえに五シリングであつたのおなじように安価である。と<sup>(81)</sup>いうことなるであらう。」

ここでペティのいうところの「自然価格」は、さきに見た十八世紀中ごろ以降の古典派的な自然価値の概念とは、あきらかに相違する。すなわちそれは、そのなかに平均的な利潤をふくむ生産費を意味するものではなく——さきに見たように、彼には利潤の概念そのものがなく、ただ「自然利子」の観念がみられるにすぎない——、労働時間によって規定される価値そのものにはかならない。しかしそれは、他の生産物との交換比率によって定められるところの、交換価値としてのみ意識されている。そればかりではなく、この交換価値を、彼は、その貨幣的表現において、すなわち価格においてのみとりあつかい、そして貨幣を実存する商品すなわち金銀と解したのである。

それは、ペティがまだ「重金主義的な表象」にとらわれていたことをしめすものであり、そのために彼は社会的総労働のうちで「金銀を獲得する特殊の種類の実労働」だけが、直接に「交換価値をうむ労働だと説明した」<sup>(82)</sup>のである。しかしそのことによつて、彼は、価値を形成する抽象的労働と使用価値を生産する具体的労働とを意識的に区別しえなかつたにもかかわらず、価値を後者すなわち自然過程としての労働の属性とみるところの価値の自然主義的とりあつかいにおちいることをまぬがれたのであり、<sup>(83)</sup>商品を生産する労働が、「直接的な使用価値を生産しなければならないのではなく、交換過程におけるその譲渡により、金銀として、すなわち貨幣として、すなわち交換価値として、すなわち対象化された一般労働として、みずからを表示しうる使用価値を生産しなければならない」<sup>(84)</sup>ということを、事実上理解しえたのである。

つぎにペティは、生産物の価格が、貨幣の量的変化にもなつて変動するとし、この貨幣量の変化を、人口との関連において追求して、一人あたりの貨幣量が多いほど穀物が高く、したがつて地代も地価も高いと結論して

いる。そして彼は、このような生産物の価格調査によって、公平な課税標準が確定されると考えるのである。<sup>(85)</sup> かくして同時に、土地の良否および地価の合理的決定というダウン・サーヴェイの課題も、『租税貢納論』において理論的に解決されたわけである。<sup>(86)</sup>

(78) Ibid, p. 50, 訳、八九ページ。メティにおける intrinsic value は、ここにみるように、あきらかに使用価値の意味にみちまわられている。

(79) Ibid, pp. 49-50, 訳、八八ページ。なお、松川、前掲論文、二〇四ページ、参照。

(80) Ibid, p. 50, 訳、八九ページ。

(81) Ibid, pp. 50-51, 訳、八九―九〇ページ。ここにおける、then one is the natural price of the other は、右のペルタスおよびローゼンベルグの解釈が正しいものである以上、「一方は他方の」ではなく、「前者（一オンスの銀）は後者（一プッシュェルの穀物）の自然価格である」と訳すべきであろう。平瀬氏（前掲書、一七四ページ）や長谷部氏（『剰余価値学説史』第一巻、邦訳五一―八ページ）はこのように訳されており、とくに久保芳和氏（『フランクリン研究』、一五〇―一五一ページ）は、マルクスと同様に、この点にフランクリンの価値論との決定的差異をみだして、詳細な解説をおこなわれている。<sup>87</sup>

(82) Marx, zur Kritik, SS. 40-41, 訳、四二ページ。

ローゼンベルグはメティの価値論を、このような意味において、「重商主義的労働価値論」と名づけている（『経済学史』一巻、九六ページ）。

(83) ローゼンベルグ、直井武夫・広島定吉訳『経済学史』一巻、八二ページ。なお八一、八三ページ、参照。

(84) Marx, a. a. O., S. 41, 訳、四二ページ。

(85) Petty, ibid, pp. 51-54, 訳、九〇―九五ページ。

労働価値論の生成にかんする一考察（松田）

(86) 松川、前掲論文、二〇六ページ、参照。

## 九

以上の考察によつてあきらかになつたベティの労働価値論の特徴は、なによりもまず、それが、国家財政というような当面の複雑で具体的な問題の考察から出発して、租税負担の公平をもとめて、地代の本質を究明し、地代を剰余価値と規定すると同時に、そこに等価値関係をみいだして、価値を人間労働に還元するという、典型的な下向法の産物であるということである。かくして労働価値論は、生成しつつある資本主義社会のもつとも簡単でもつとも抽象的な生産関係を表現する基礎的範疇として定立されたのである。

とくにベティよつては、じめてそのことがなしとげられたのは、もとより彼の卓越した抽象能力——それは天賦のものであるとともに、自然科学的研究によつてみぎあげられたものであつたであろう——によるものであろうが、彼が生きたイギリスのブルジョア革命期がまさにこのような抽象化を可能にする程度にまで成熟した資本主義的諸関係をしめしはじめていたということともに、彼の生活体験、とくにアイルランドにおける土地測量・分配事業をつうじて、彼が植民地における資本主義的諸関係の強力的創出過程を身をもつて知り、そこに端初的な資本制生産様式の内的連関を洞察する鍵をみいだした<sup>(87)</sup>ということと、関連があるであらう。

だがこのようなベティの労働価値論は、生きた全体からの分析・下向の到達点であつて、それがより複雑で具体的な諸範疇への上向の出発点となり、経済学体系の基礎原理として意識的に位置づけられることはできなかった。(それはアダム・スミスの『国富論』によつてはじめてなしとげられたのである。)そのかぎり、彼が科学と

しての「経済学の建設者」であるというマルクスの評価は、きわめて限定された意味に理解されるべきであろう。ところで労働価値論が表現するところの、資本主義社会のもっとも単純で抽象的な生産関係は、社会的分業と生産手段の私有とを前提するところの商品生産関係である。したがって社会的分業の把握は労働価値論成立の土壤であったといえよう。ミークは、このことを経済学の歴史についてつぎのように概括している。「労働は価値の源泉である」という十七世紀の観念は、われわれがみてきたように、経済組織の資本主義的形態が分業をおしすすめうるという事実のために、それ以前の諸形態よりもいつそう生産的であるということ、別のいい方ではたものにはすぎないのがつねであった。いかえれば、この観念は本来、資本主義的マニファクチュアにおける分業の、潜在能力の認識と、むずびついていた。しかし十八世紀がすすむと、『労働は価値の源泉である』という観念は、マルクスがマニファクチュア内の分業とよんだものよりもむしろ彼が社会内の分業とよんだものにむずびつくにいたった。そして主としてこの結びつきから、古典的労働〔価値〕論はついに発生したのである。<sup>(88)</sup>

しかしながら、すでに十七世紀中ごろのペティにおいて、マニファクチュア的分業のみならず社会的分業が生産力を増大させることの、明白な指摘がみいだされる。<sup>(89)</sup>彼はいう。「非常に大きな都市では、製造業はおたがい、他の製造業を生じさせ、各々の製造業は可能なかぎり多くの部分に分たれるであろうから、それによって各々の職人の仕事は簡単で容易になるであろう。一例をあげよう。時計の製造において、もしひとりの人が歯車をつくり、他の人がバネをつくり、もうひとりの人が文字板を刻み、さらに他の人がケースをつくるとすれば、そのときには、すべての仕事がだれかひとりの人の肩にかかるばあいよりも、時計はよく良くより安いであろう。」<sup>(90)</sup>

商品の価値という範疇は、資本主義社会の「他のあらゆる社会関係の基礎によこたわる」ところの、「相互に独立な商品生産者としての人々の関係」を表現するものであるが、社会的分業はこの関係を根底において制約するものであるから、その把握から、価値の本質は、社会的総労働の一部分がその生産にわりあてられたということによって、商品にあたえられた属性であるという認識——たとえ明白な意識をもってではなくとも——にいたる距離は、さほど遠くはないであろう。

(87) 松川、「サー・ウィリアム・ペティの生涯」、七一ページ、参照。

(88) Meek, *ibid.*, p. 37. 訳、三六ページ。

(89) Marx, *zur Kritik*. S. 41. 訳、四二ページ参照。ミックもこのことを指摘している (*ibid.*, p. 39. (訳、三八ページ))。

(90) Petty, *Another Essay in Political Arithmetick, Economic Writings of S. W. Petty*, Vol. II. p. 473. 傍点(引用者)の個所が社会的分業の認識をしめしている。

(91) Meek, *ibid.*, p. 39. 訳、三七ページ。もっとも、労働価値論は、生産関係が交換関係を規定するということの特異な表現だというミックの考え (*ibid.*, p. 151. 訳、一八八ページ) は、宮本義男氏が指摘されているように、価値範疇が、生産関係のみならず流通・分配関係をも包含することを見落した一面的な見解であろう。(ミック『労働価値論研究』の方法論的見地からの検討)、『経済研究』第八卷第二号一九五七年五月、一八六—七ページ、参照。)

ペティの労働価値論のいまひとつの特質は、さきに指摘した彼の剰余価値論の特徴に関連をもつものである。さきにもみたように、彼はまず、剰余価値とはなにか、それはどのようにして生じるかという問題をとし、それが流通過程におけるたんなる差額ではなくて、生産過程における剰余労働の所産であることをあきらかにしたのち、すすんで価値とはなにか、それはどのようにして生じるかという問題にゆきついたのであった。そのさい

彼は、地代を剰余価値の基本的形態、利子をその副次的形態とみなして、独立の範疇としての利潤をみとめていない——彼においては利潤は地代にふくまれていたとおもわれる<sup>(92)</sup>のであるが、それは彼の分析不足を物語るというよりも、当時の現実に対応するものであつたであらう。また彼が、剰余価値を問題としながらも、賃労働の雇用を無視して、それを直接生産者自身の剰余労働に還元していることについても、同様のことがいえるであらう。

彼の時代すなわち十七世紀の中ごろにおいては、資本制生産様式の発展はまだ十分ではなく、資本家と労働者との階級分化は決定的なものとはなつておらず、両者がいわゆる第三階級として一体となつて、封建的秩序に抗して、生産力の大きな発展を可能にする新しい市民社会をきざきあげようとしていたのである。ペティの労働価値論は、まさにこのような段階に特有の理論であつたとおもわれる。すなわちそれは、資本と労働との未分化の段階に照応するものであり、したがつていうところの労働は、利潤をめざす資本家活動の一面としての経営活動をもふくめた生産活動一般、すなわち広義の勤労の意味でなければならぬ<sup>(93)</sup>。ペティはこのような意味における勤労者、厳密に言えば、当時の歴史的段階においてこのような働く生産者一般の先頭にたち、これを代表していた新興ブルジョアジー——マニファクチュアの産業資本家のみならずそれを基礎とした商業資本家をもふくめた——の立場から、その経済理論をつくりあげたものとおもわれる。したがつてペティの労働価値論は、おなじく働く生産者階級の立場を代表していたとはいへ、明白な利潤の観念をもち、したがつて資本と労働との分化を前提とするところの、ミススおよびリカードのそれとは、その性格を異にするものであるといわねばならない。

(92) ペティにおいて、利潤が賃銀のうちにくまれていたとみなしえないのは、彼にとっては、賃銀はちようど労働者の生存に必要な生活資料の価値に等しい、と考えられていたからである。彼は賃銀をつぎのように法則的というよりもむしろ規範的に規定している。「法律は、……労働者にちようど生きてゆけるだけのものを認めるべきである。というのは、もし二倍のものを認めるとすれば、彼はなしえたであらうし、またさもなければなしたであらうところの半分しか働かないからである。これは社会にとって、それだけの労働の果実の損失を意味する。」(ibid., p. 87. 訳、一五〇ページ)と。

(93) 白杉庄一郎「ペティの経済理論」『経済論叢』第五七巻第二号、昭和十八年八月、三九—四一ページ、参照。

## 十

ペティにつづく労働価値論の定式者は、半世紀あまりのちのアメリカ独立の父ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) であった。彼は、一七二九年に刊行した青年時代の著作『紙幣の性質と必要にかんする小研究』(A Modest Inquiry into the Nature and Necessity of a Paper Currency)——これは取引のために必要な貨幣の不足にかんがみて紙幣増発の必要を論じたパンフレットである——<sup>(94)</sup>において、「ほとんど当然のこのように明晰に交換価値を労働時間へと分析した」<sup>(95)</sup>のである。

そこではまず、社会的分業がやや漠然と把握され、そしてその結果として商業および貨幣が生じることが説かれ、そして以上の分析からきわめて自然に労働価値の定式化がみちびきだされている。すなわち、「さまざまな国だけではなく、おなじ国のさまざまな部分でさえも、それらに特有なもつとも適合した生産物をもつことは、神がそう命じたのであり、そして同様に、さまざまな人がさまざまな技術や製造業に適した才能をもつこともそ

うなのであるから、したがって商業すなわちある商品または製造品と他のそれとの交換は、人類にとって高度に便利で有益である。……交換を容易にするために、人々は貨幣を發明した。それをつうじてまたはそれによって、労働とまたはある商品が他の商品と、交換されるのであるから、それは交換の媒介物とよばれるのが適當である。……交易トレストは一般に、労働と労働との交換にはかならないのであるから、すべての物の価値は……労働によつてもつとも正しくはかられる。<sup>(96)</sup>

この最後の一句は、マルクスが、フランクリンが「みずから意識せずに」、「交換される諸労働の差別性の捨象——すなわち同等な人間労働への還元」をなしとげたといっているところのものである。なぜなら、「彼はまず『ある労働』について語り、つぎには『他の労働』について語り、最後にはあらゆる物の価値の実体として以外の特徴をもたない『労働』について語っている」<sup>(97)</sup>からである。このようにフランクリンは、事実上すべての物の価値が抽象的労働に還元されると考えたのであるが、「しかし彼は、交換価値にふくまれている労働を、抽象的な、一般的な、社会的な労働——この社会性は個人的労働の全面的外化から生じる——として展開しなかつたから、必然的に、この外化された労働の直接的実存形態としての貨幣を誤認した。だから彼にとっては、貨幣と交換価値をうむ労働となんら内面的なつながりをもたず、貨幣はむしろ、技術上の便宜のために交換のなかへ外部からもちこまれた道具である」<sup>(98)</sup>。このようなフランクリンの価値論の長所と短所とは、これをベティの価値論と対比するとき、あきらかとなるであろう。

(94) 「フランクリン自伝」、松本慎一訳（岩波文庫）、一〇三—一〇五ページ、参照。

(95) Marx, Zur Kritik, S. 43. 訳、四ツヤーン。

(96) The Writings of Benjamin Franklin, edited by A. H. Smyth, 1905-7, Vol. II, pp. 144-146. Quoted in Meek, *ibid.*, p. 41. 訳、四〇ページ。

(97) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 56. 訳、一三八ページ。

(98) Marx, *Zur Kritik*, S. 44. 訳、四八一四九ページ。

フランクリンは、労働価値論をつぎのように価値尺度論として説きおこしている。「銀によってすべてのものの価値をはかることが、これまでの通例であった。しかし銀そのものは、……なんら一定の永久的な価値をもつものではない。だから、銀以外になにか価値尺度としてもつと適当なものを、さだめることが必要であるとおもわれる。そしてそれは労働であるとわたしはおもう。銀の価値は、他のもの「の価値」とおなじように、労働によつてはかられる。」<sup>(96)</sup>そしてそれにつづけて——おそらくはペティの影響のもとに——<sup>(97)</sup>ペティとおなじ例によつて、自然価格を規定している。「ある人が穀物の生産に従事し、他の人が銀を採掘し精錬するものとしよう。一年のおわり、あるいは一定期間ののちには、穀物の全生産物と銀の全生産物とは、それぞれ相互の自然価格 (the natural Price of each other) である。もし一方が二十ブッシェル、他方が二十オンスの銀は一ブッシェルの穀物の生産にもちいられた労働に値いする。いまもし、あるより近距離の、より採掘しやすい、より豊饒な鉱山の発見によつて、ある人がまえに二十オンスの銀をえたのとおなじ程度の容易さで四十オンスの銀をうるものとし、二十ブッシェルの穀物の生産にはやはりまえとおなじだけの労働が必要であるとすれば、そのときには、二オンスの銀は、一ブッシェルの穀物の生産にもちいられる、まえとおなじだけの労働以上には値いしないであろう。そして他の事情が変化しなければ、まえには一オンスの銀に値いしていた一ブッシェルの穀物は、いまでは二オ

ンスの銀に値いするであろう。<sup>(101)</sup>

ペティは、「一オンスの銀は一ブッシェルの穀物の自然価格である」と語っているのに、フランクリンは、一ブッシェルの穀物と一オンスの銀とは「それぞれ相互の自然価格である」とのべている。この差異は決定的である。なぜならペティにおいては、銀は等価形態に、穀物は相対的価値にあるばあいのみを考えられているが、フランクリンにおいては、穀物も銀もこも相対的価値形態と等価形態とにあるものと考えられているからである。<sup>(102)</sup> 等価形態に固定された銀は事実上貨幣である。したがってペティは、価値をただちに交換価値とみなしたばかりでなく、それをその貨幣的表現すなわち価格においてのみとりあつかい、貨幣を金銀と同視した。かくしてまた彼は、金銀を採掘する特殊の具体的労働のみが直接に価値をうむものと考えたのである。それは重商主義的な貨幣の、一般的にいえば価値形態の一面的な重視をしめすものである。これにたいしてフランクリンは、一般的等価物としての金銀すなわち貨幣の特殊性をみとめない。彼にとつては商品はすべてそのまま貨幣であり、貨幣はたんなる商品である。かくして、彼はすべての労働——事実上抽象的労働——が価値を形成することをみとめている。これはペティからの本質的な一歩前進である。だが、彼はいわば価値形態の犠牲において、価値の体を事実上認識したのである。だから彼は、さきに見たように貨幣の本性を誤認した。それは価値形態の必然的な発展形態としてとらえられないで、たんなる交換手段とみなされた。かくしてペティとフランクリンとの対立は、価値論の領域における、重商主義的見解と古典派的見解との「抽象的対立」<sup>(103)</sup>——それは重商主義一般にたいするアダム・スミスの批判において展開された形態をとっている——の最初の顕現であつたといえよう。

(9) Franklin, Writings, Vol. II, p. 144.

労働価値論の生成にかんする一考察(松田)

(100) 久保芳和『フランクリン研究』、一四八ページ、参照。

(101) *Ibid.*, p. 144. なおフランクリンは、価値決定論としては、右のように投下労働価値説をとっているが、価値尺度論としては、右の引用文につづけて、「だから一國の富はその國の住民が購買しうる労働の量によってはかられるべきである。」(*ibid.*, p. 144) と言っていることからわかるように、支配労働価値説をとっている。(久保、前掲書、一〇五ページ、参照)

(102) 久保、前掲書、一五一ページ、参照。久保氏は、マルクス・ローゼンベルグの見解に依拠して、ペティとフランクリンとのこの差異が重要であることを強調され、両者はおなじ意味のものにすぎないとされる三辺清一郎教授の見解(ペンジヤミン・フランクリン研究「尾道短大紀要第一集」)を批判されている(同書、一五二―一五三ページ)が、まったく同感である。

(103) Marx, *Zur Kritik*, S. 186. 訳「二二二ページ。もっともこのことばは、重金主義的貨幣観にたいするヒュームよりカードッの貨幣数量説の対立にかんじていわれているが、貨幣＝価値形態を重視する重商主義と価値を人間労働に還元しながら価値形態を見落した古典経済学との対立についても、同様のことがいわれうるであろう。

## 十一

『国富論』の出版以前のもっともすすんだ労働価値論の叙述は、——『資本論』に引用されている——<sup>(104)</sup>一七三八年ごろ匿名で出版されたパンフレット『一般に貨幣の利子、とくに公債の利子にかんする若干の考察』(Some Thoughts on the Interest of Money in general, and particularly in the Public Funds, etc.) にみいだされる。<sup>(9)</sup>この著者は、商品の使用価値、交換価値および価格の、つぎのような明白な規定をあたえている。

「生活必需品の本当の価値は、それらが人類の維持に寄与する役割に比例する。そしてそれらが互に交換されるときこれらの価値は、必要とされるにちがいない労働の量によって規制される。そしてそれらが売買され、

共通の媒介物にくらべられたときの、それらの価値または価格は、使用された労働の量と、媒介物すなわち共通の尺度との、豊富稀少の程度に左右される。<sup>(106)</sup> 右の交換価値が決定される仕方の叙述は、——マルクスが当該個所にこの一句を引用していることから知られるように、——實質上「社会的必要労働時間」の概念の先駆である。

だがさらに、この書物には、商品の生産についてやされた労働量によって価値が規定されることの、アダム・ミスよりも「適切な」<sup>(107)</sup>叙述がある。「商業が、たんにある商品と他の商品との交換によっておこなわれた、より以前の時代には、ある物を他の物と交換するにあたって利用しえた基準としては、それらの物の生産にそれぞれ使用された労働の量しか、わたしにはわからない。ある人はこの生活必需品を調達するのに一週間かかり、彼の労苦のために、ちようど彼を一週間維持するだけのものを、うけるに価いする。そして、彼にたいしてなにかほかのものを交換によってあたえる人は、自分がなににちようどおなじだけの時間と労働を要費するかを算定することによってより以上に、なにが真の等価であるかをより正しく評価することはできない。それは事実上、ある物における一定の時間のある人の労働を、他の物におけるおなじ時間の他の人の労働と、交換することにはかからない。<sup>(108)</sup>」

これは、アダム・ミスが初期の社会状態において商品交換を支配すると考えた、あの「基準」(rule)の、より早い明白な叙述であろう。<sup>(109)</sup> そのばあいには、ミス流にいえば、投下労働量は支配労働量と一致する。だがそれは、単純商品生産社会というような歴史的段階に特有な価値法則ではなくて、資本制生産様式のもっとも簡単に抽象的な生産関係たる商品生産関係を表現する法則であり、したがってまさに資本主義社会のもっとも基礎

的な経済法則である。それはともかくとして、ここで注目すべきことは、この「基準」が交換比率の決定において妥当するのは、「取引する人々が平等な立場にたつばあ<sup>(10)</sup>」だけであるということの、明白な認識が、この著者にみいだされることである。それは、労働価値論の成立は、人間の自由と平等の觀念の確立を前提として、それはまた商品生産と商品流通の全般的支配を条件とするという事実の、もつとも早い認識であつたであらう。

(104) Marx, Das Kapital Bd. I, S. 44. 訳、一二二ページ、S. 51. 訳、一三二ページ。

(105) Meek, *ibid.*, p. 42. 訳、四二二ページ。

(106) Some Thoughts on the Interest of Money in General, pp. 36-37. Quoted in Meek, *ibid.*, pp. 42-43. 訳、四二二  
四三二ページ。

(107) Marx, a. a. O., S. 51. 訳、一三二二ページ。

(108) Some Thoughts, p. 39. Meek, p. 43. 訳、四三二ページ。

(109) Meek, *ibid.*, p. 44. 訳、四四二ページ。

(110) Some Thoughts, p. 39. Meek, *ibid.*, p. 43.

(111) Marx, a. a. O., S. 65. 訳、一五二一三二ページ。

なお註(167)をみよ。

労働価値論はいままでにみてきたように、社会的分業の概念と、手をたずさえて発展してきた。この概念の発展に、とくに貢献した者は、マンデヴィル(Mandeville)<sup>(112)</sup>とハチソン(Francis Hutcheson)<sup>(113)</sup>であつた。ハチソンはまた、商品の交換価値は、その効用に「まったくしたがわな<sup>(114)</sup>い」ということをもあきらかにした。か

くして、商品は、その生産に社会的総労働の一部分がわりあてられることによって、価値をもつにいたるのだというところが、次第にあきらかになってきた。しかしそれだけではまた不十分であった。労働価値論が完全に成立するためには、決定的に重要な富と価値との区別が確立されねばならなかった。<sup>(115)</sup> 使用価値の総体としての富は、自然と人間の労働との創造物である。しかし自然は人間に無償でその援助を提供するのであって、社会にとつての生産の真の費用は、人間労働の支出だけであり、それだけが価値を形成するのである。このことが理解されてはじめて、ペティによつて代表されるような土地と労働とを価値の標準・尺度とみなす見解が克服される。このような観念にもとづく労働価値論は、その他の費用理論にくらべて、さきに見たように、いつそう巨視的・長期的な、したがつてもつとも根元的な原理であり、資本主義体制の把握の原理であるとともに、また古典経済学者があのように重視したところの、「産出と投入の価値差額」〔剰余価値〕の発生と存続という問題<sup>(116)</sup>を合理的に説明しうる唯一の理論であることを、結局証明したのであり、そしてそれによつて、すべての科学的経済学の基礎理論となつたのである。

(112) マンデヴィルは、『蜂の寓話』の第二部 (The Fable of the Bees, second part, 1792) のなかで、蜂のようになつてゐる。「わたしは、人がそのなかで、他人のために労働することのなかに自己の目的をみいだしうるような、規律ある被造物となることゝの、政治体というものを理解する。」と。(Mandeville, *ibid.*, ed., F. B. Kaye, Vol. I, p. 347. Quoted in Meek, *ibid.*, pp. 39-40. 訳、三八一四〇ページ。)

(113) ハチソンが社会的分業の概念を發展させたことについては、Meek, *ibid.*, p. 41. 訳、四一ページ、参照。彼の主著は、*A System of Moral Philosophy*, 1755. 頁 48。

- (114) Hutcheson, *ibid.*, Vol. II, p. 53. Quoted in Meek, *ibid.*, p. 34. 訳「三二二ページ」。この観念は、周知のように、スキズの価値論の出発点をなしたものである。
- (115) Meek, *ibid.*, p. 42. 訳「四一一二ページ」。p. 44. 訳「四四二ページ」。周知のようにこの区別は、リカードゥにおいて終局的に確立されるのである。ただし、富をただちに使用価値と同視するのは誤りであって、商品生産社会の富は、価値と使用価値との統一物である。このことをスキズは事実上理解しつづた。(Marx, *Theorien*, I, SS. 136-7. 訳「二四〇—二四一ページ」(参照))
- (116) *Ibid.*, p. 44. 訳「四四—四五二ページ」(参照)。

## 十二

以上のようにして形成されてきた労働価値論を理論体系の基礎にすることによって、一つの独立の科学としての経済学を創始したものは、いふまでもなく、アダム・スキズ (Adam Smith, 1723-90) であった。彼の名著『国富論』(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776) においては、労働価値論と自然価格論とが同時に定立されている。しかし、彼の学説の成立過程においては、自然価格論——ただしつぎにみるように本来の意味でのそれではないが——を媒介項とする労働価値論の生成という、彼以前の経済学の歴史がくりかえされているようにおもわれる。

すなわち、一七六二、三年ごろの彼の講義筆記である『グラスゴー大学講義』(Lectures on Justice, Police, Revenue, and Arms, delivered in the University of Glasgow, 1896) は、価値—価格論におよび、『国富論』の(117)それとはいちじしく異なった特色をしめしている。『講義』においては、「一国の富裕を増進するものは分業である。」

とされ、文明国における富の分配の非常な不平等にもかかわらず、その労働者をして野蛮国の君主よりも多量・良質の必需品と便宜品とをえさせるものは、分業にもとづく生産力の増進であり、この分業の発展によつて商品は安価となり、労働は高価となるとされているのであるが、そこでスマスは、生産を、なおみずから生産手段を所有している、多かれ少かれ独立の職人ないし労働者によつて、おこなわれるものとみなしていたようにおもわれる。<sup>(119)</sup>

そのことと関連して、『講義』には、資本の利潤の明確な概念がない。利潤ということばはどこどころにかわっているが、それは使用された資財（ベトツク）の量となにか規則的な関係をもつものとみなされていないのであつて、たんなる利得を意味するにすぎない。すなわち『講義』には、『国富論』にみられるような利潤の自然率——それは自然価格の構成要素の一つである——という観念はみとめられないのである。<sup>(120)</sup> そればかりではなく、『講義』には資財（ベトツク）の概念はあるが、それと区別されたものとしての資本（キャピタル）の理論——『国富論』第二編——がなく、資本の蓄積は、『国富論』におけるような中心的な役割をまだ演じていないのである。<sup>(121)</sup>

以上のような『講義』の特質は、その価値＝価格のうちに、いかにあらわれているであらうか。社会的分業の拡大にともなつて、諸個人間の社会的つながりは、ますます彼らの生産した商品が市場において一定の価格で、相互に交換されるという事実に依存するようになったが、そのさい彼の同時代人たちと同様にスマスの注意をひいたことは、多くの商品の価格は、需要供給の変動におうじてたえず変化するが、しかもそれらは一つの中心価格をめぐつて、たえずそれにひきつけられているという事実であつた。そこでスマスにとっては、彼が説明すべき、「どんな事情が商品の価格を左右するか」という問題は、『講義』においては、つぎの二つの問題に解消す

ることとなった。第一に、この中心価格、すなわち、「自然価格」(natural price)とはいかなるものであり、またその構成要素はなんであるか。第二に、商品が市場で実際に売られる市場価格はこの自然価格とどう関係にあるか。<sup>(122)</sup>

- (117) Adam Smith, Lectures, on Justice, Police, Revenue, and Arms, ed. by E. Cannan, p. 162. 高島善哉・水田洋訳『リヌスコー大学講義』三二四ページ。
- (118) Ibid., pp. 161-162, p. 163, pp. 164-165, 訳三二二—二二三ページ。三二五ページ。三二七ページ。
- (119) Meek, *ibid.*, p. 47, 訳四九ページ、参照。
- (120) Ibid., pp. 46-47, 訳四八ページ、参照。
- (121) Ibid., p. 46, 訳四七—四八ページ、参照。なお、藤塚知義『アダム・スミス革命』、四四—五七ページ、参照。
- (122) Ibid., p. 48, 訳五〇ページ、参照。

『講義』におけるこの価値＝価格論の問題提起を、『国富論』のそれと比較してみれば、ただちにあきらかになることは、『国富論』における二つの問題のうちの第一のもの、すなわち、「交換価値の真の尺度、いいかえれば、すべての商品の真実価格 (real price) はなにに存するか」という問題——これは第五章「商品の真実価格と名目価格、すなわちその労働における価格と貨幣における価格について」に論じられている——が、そこに欠けていることである。(『国富論』における他の二つの問題、すなわち「商品価格の構成部分について」——第六章——と「商品の自然価格と市場価格について」——第七章——は、ちょうど『講義』の問題と合致する。) スミスの真実価格は価値にはかならないから、この構成からすでに、『講義』では労働価値論が未成立であることが知

られる。

『講義』では、「自然価格」は、「人々が、他のものよりも、とくにある種の勤シダスリ勞をえらんだとき、彼らを働いているあいだ維持するに足るものを、この仕事によって獲得」<sup>(123)</sup>させるような価格とみなされている。そしてスミスは、この商品の自然価格を、その生産に使用された労働の実際の価格にではなく、「労働の自然価格」にむすびつけた。「人は、つぎのようなばあいには、彼の労働の自然価格をえるのであって、すなわち、それが労働期間中彼を維持し、教育の費用を支払い、十分長生きしなかつたり、その仕事で成功しなかつたりする危険を償うに足りるときがそうである。人がこれをえるときには、労働者にたいして十分な奨励があり、商品は需要に比例して生産され、「そしてその自然価格で売られ」<sup>(124)</sup>るだろう。」

これによってあきらかになることは、スミスは『講義』では、自然価格をたんに直接生産者に十分な報酬をあたえるような価格と考え、自然率の利潤をふくむところの価格とは考えなかつた、ということである。したがってここでの自然価格は、『国富論』のそれとは異なつて、平均利潤をふくむ生産価値ではない。だがそれは、生産についてやされた労働量に還元されてはいないから、もとより価値ではない。<sup>(125)</sup>『講義』には、「注意すべきことは、貨幣ではなくて、労働が、価値の真の尺度である、ということである。」<sup>(126)</sup>というこはがみいだされるのであり、それを『国富論』の労働価値論の萌芽とみなすことも可能ではあるが、しかしこの概念は、まだ価値論の定式化というよりは、主として、富裕は貨幣に存するという重商主義の見解に対抗する理論的武器にすぎなかつたのである。<sup>(126)</sup>

もつとも、スミスは、商品の自然価格がそれを生産した労働の自然価格に等しいと考えていたのではないが、自然価格の他の構成要素についてはほとんどなにもいわなかつたのであり、多分それをあたえられたものとみな

(127) しては、交換価値が主として賃銀費に依存するという、前世紀にひろくうけいれられた観念から、ただ商品の「自然」価格が労働のそれに依存するという点で進歩しただけである。それは、さきにみたように、ミスにとっての「経済のモデル」<sup>(128)</sup>が、まだ従来の独立小生産者の経済であつたからである。ミークのいうように、「ミスが暗黙のうちに仮定したのは、生産の指導が、自分たちの資本にたいする利潤の自然率をうけとらうと期待する、資本家的雇用者の手中ではなく、自分たちの労働の自然価格をうけとらうと期待する、多かれ少なかれ独立した労働者の手中にある、ということであつた。資本の利潤は、労働の賃銀から分離し區別された所得の一般的な種類としてはまだあらわれていなかったし、少なくともあらわれたものとしてミスによつて認識されてはいなかった。……したがつて、利潤の自然率はまた、自然価格の独立の構成要素としては、あらわれな

す。」<sup>(129)</sup>のやま。

(123) Smith, Lectures, pp. 173-174. 訳、三三九ページ。

(124) Ibid., p. 176. 訳、三四三ページ。〔 〕内は編者キャンナンによる附加。

(125) Ibid., p. 190. 訳、三六四ページ。

(126) Meek, *ibid.*, p. 51. 訳、五四ページ。

(127) Ibid., p. 49. 訳、五一ページ。

(128) Ibid., p. 48. 訳、四九ページ。

(129) Ibid., p. 49. 訳、五二ページ。

第二の問題——自然価格と市場価格との関係——にたいするスミスの答えは、市場価格を左右する三つの事情

をあきらかにすることからはじまる。その事情とは、第一に、「その商品にたいする需要または必要」であり、第二に、「その必要に比較しての、その商品の豊富または稀少」であり、第三に、「需要する人々の富裕または貧困」<sup>(130)</sup>である。いかえれば、市場価格は、実現可能な供給と有効需要との関係によって、決定される。そして市場価格と自然価格とは、別々の原理によって決定されるにもかかわらず、つぎのようにして「必然的にむすびつけられる。」のである。「もしある商品の市場価格が非常に高く、その労働が非常に高い報酬をうけるとすれば、市場には莫大な労働が群がり、その商品はまえよりも多量に生産され、そしてそれは下層階級の人々にも買えるようになる。もし各々十個のダイヤモンドのかわりに一万個のそれがあるとすれば、それは非常に安くなるであろうから、だれでもそれを買うようになって、その自然価格にまで下落するであろう。さらに、市場が在貨過多になって、その製造業の労働にたいして十分な報酬が支払われないとすれば、そのばあいには市場価格は自然価格以下に下がるから、だれもそこで働くことを契約しないだろうし、彼らはそれによって生活費をえることができない」<sup>(131)</sup>。

このように、スミスはここでは、市場価格を自然価格にまでひき下げる力を、彼が「さまざまな労働者の競合」<sup>(132)</sup>とよんだものと考えていた。すなわち、彼はまだ、自然価格を中心として市場価格を運動させる、(そしてその結果として利潤率の均等化をもたらす)機構すなわち競争の眞の性質を理解していなかった。「講義」において彼は、この競争の主な動機を、各々の生産者が自己の労働にたいして可能な最高の収益をえようとする欲求と考えた。しかし(資本主義社会における)この競争の眞の主要な動機は、——彼が結局知ったように——各々の資本家が自己の資本にたいして可能なかぎり最高の利潤をえようとする欲求なのである。それこそ、それによって、

彼が「産業の自然的均衡」<sup>(134)</sup>とよんだ状態をもたらす、主要な力なのである。

(130) Smith, *ibid.*, pp. 176-177. 訳、三四四ページ。

(131) *Ibid.*, p. 178. 訳、三四六ページ。

(132) *Ibid.*, p. 179. 訳、三四八ページ。

(133) Meek, *ibid.*, p. 50. 訳、五三ページ、参照。

(134) Smith, *ibid.*, p. 180. 訳、三五〇ページ。

かくして、『グラスゴー大学講義』および『国富論草稿』(An Early Draft of Part of the Wealth of Nations)<sup>(135)</sup>——それは一七六三年のものと推定される『講義』の改訂であるが、その価値—価格論はまだまったく『講義』の方式にしたがっている——から、『国富論』へのスミスの発展は、これをその全体的な対象把握の点からいえば、——ミークの表現をかりると、——「努力と資源との均衡化の主要な運動を、自己の労働の収益を極大化しようとのぞむ多かれ少なかれ独立な労働者たちによって、ひきおこされるものとしてえがく」ところの経済のモデルから、「この初期の見解のいちじるしい痕跡を、なお多くのこしているとはいえ、これらの均衡化の運動を、主として自己の利潤の極大化をのぞむ資本所有者によってひきおこされるものとしてえがく」<sup>(136)</sup>とところのモデルへの発展であった。

それはもとより、一七六、七〇年代におけるイギリス、とくにグラスゴーを中心とするスコットランドの経済変化の観察の結果であったであろう。かくして、ギルドの親方と職人および独立自営農民からなる独立小生産者の社会にかわって、「土地の地代、労働の賃銀、資本の利潤」をそれぞれの所得とする、地主、労働者、資本

家という「社会を構成する三大基本的階級」<sup>(137)</sup>からなりたつ資本主義社会が、スミスの経済学の対象となったのであり、この社会の経済的発展の主な動機であり推進力であるものは、これらの階級のうちの第三のものが、彼らの利潤を極大化し、資本を蓄積しようとして突進することだと考えられた。そこで資本の蓄積は、富裕の増大の基本的原因としてつかまれ、資本蓄積論は『国富論』の枢軸となった。しかしもとより蓄積過程は孤立的に観察されうるものではないのであって、蓄積されるものは、まず生産され、分配されねばならなかった。<sup>(138)</sup>そして生産された商品は、社会的労働の所産として価値であり、かくして労働価値論がスミスの経済学体系の基礎・出発点となったのである。

(135) この草稿は W. R. Scott 教授によって発見され、氏の Adam Smith as Student and Professor, 1937. におきめられてゐる。邦訳は、大道安次郎訳『国富論草稿その他』、一九四八年および水田洋訳『国富論草稿』（世界古典文庫）、一九四八年。

(136) Meek, *ibid.*, p. 53. 訳、五七ページ。

(137) Adam Smith, *Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan, Vol. I, p. 248. 大内兵衛訳『国富論』（岩波文庫）、第一分冊、四六ページ。

(138) Meek, *ibid.*, p. 54, p. 57, p. 59. 訳、五七一五八ページ。六三ページ。六四ページ、参照。

### 十三

アダム・スミスは、『国富論』（*Wealth of Nations*, 1776）において、労働価値論を経済学体系の礎石として定

定することによつて、新しい生産力の担当者としての広い意味の働く階級の立場にたつて経済学をきざきあげた。それは、当時までの支配勢力であつた封建的・絶対主義的上流階級ならびに重商主義的商業資本に対立し、これを圧倒しようとしていた、新興産業資本のイデオロギーであり、そしてこの産業資本家階級は、当時産業革命の前夜においてなお、労働者階級をふくむ広義の働く生産者階級の代表者として、その先頭にたつていたといつてよいところをもつていたのである。<sup>(139)</sup>

(139) 白杉庄一郎『経済学史概説』、一一九、一二四―五、一四二―三ページ、参照。

『国富論』におけるスミスの価値論は、当然、社会的分業にかんする彼の議論からはじまつている。「すべて国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品と便宜品とを、本源的に供給する資源である。」<sup>(140)</sup> という冒頭の一句をうけて、スミスは、国民の富裕は、「この生産物またはそれをもつて購入したものの、それを消費する人間の数にたいする比率が、多い少いにしたがつて」決定され、そしてこの比率は、「その労働の適用上における熟練、技巧および判断いかん」と、「有用な労働に使われている人々の数とそういう労働に使われていない人々の数との比率いかん」とによつて規定される——しかも富裕の程度は、「この二つの事情のうち、後者よりもより多く前者に依存する。」<sup>(140)</sup>——と考える。かくしてまず、「労働生産力改善の諸原因と生産物分配の秩序」が、第一編の主題となるのであるが、生産力改善の諸原因のうちで彼が実際にとりあつていゝものは、分業のみである。<sup>(141)</sup>

すなわち、第一章より第三章までは、分業を論じているが、その冒頭に彼は、「労働の生産力における最大の改善、ならびに労働がどこかへむけてもちいられるにさいしてみられる熟練、技巧および判断の大部分は、分業の

結果生じたものとおもわれる。<sup>(142)</sup>」とのべているのである。スミスは、この生産力と富裕の基礎としての分業を、マニユファクチュア的分業と社会的分業との双方をふくめて、理解している。すなわち、彼は、両種に分業の存在に気づいているが、両者の相違をたんに主観的なものとみなしている。<sup>(143)</sup>しかしスミスの本意は、マニユファクチュアのなかから、その生産力の基礎としての分業をとりだし、このおなじ分業が、商品生産者たちのあいだに、眼にみえないかたちにおいて広範に存在していることをみいだして、ここに富の理論の端初をおくことであつたとおもわれる。<sup>(144)</sup>

事実、第二章および第三章において問題とされているのは、ほとんどもっぱら社会的分業である。すなわち、スミスは、「分業を発生させる原理」を、人間の本性としての交換性向にもとめ、これを自愛心 (self-love) によつて基礎づけているのであるが、——このように分業がつねに交換を前提すると考えることは誤りであるけれども、——このような分業論を媒介として、価値論がうまれてくるのである。すなわち、社会的分業を基礎とする諸商品の交換によつて、あらゆる使用価値をつくる異質的な私的労働が、同時に等質的労働として、社会的総労働の一部たることをしめすのであり、<sup>(147)</sup>スミスは事実上、<sup>(148)</sup>価値を、商品が社会的労働の生産物であることによつて、商品にあたえられる属性であると、みなしていたのである。

したがつて、それにつづいて、貨幣の本質の問題——スミスは、貨幣を、第一次的には交換手段としての機能から、第二次的に価値尺度としての機能から、説明しているのであるが、——との関連において、価値論の問題が提起されている、第四章の冒頭において、つぎのように、価値論が研究されるべき場が、商品生産社会に限定されているのは、きわめて当然のことである。「分業がひとたび確立されると、ある人の欲望のうち、彼自身の

労働の生産物がみたしうるのは、きわめて小さな部分にすぎない。彼は、その欲望の大部分を、彼自身の生産物のうち彼自身の消費をこえる余剰部分を、他人の労働の生産物のうち彼が必要とする部分と、交換することによってみたすのである。すべての人は、こうして交換によって生活し、すなわちある程度商人となり、そして社会そのものも、商業社会とよんでよいものになる。<sup>(150)</sup>」

(140) Adam Smith, *Wealth of Nations*, ed. by Cannan, Vol. I, pp. 1-2. 大内兵衛訳、国富論、(岩波文庫) 一、一五一—一六ページ。(ただし、訳文は若干変更した。)

(141) スミスが、生産力改善の諸原因のうち分業のみをとりあげたことは、マニユファクチュア的分業にかんするかぎりでは、内田義彦氏のいわれるように、スミスが、生産力の構成諸要素のうち、自然や生産手段のような客体的契機よりも、人間労働という主体的契機を、しかも労働の量よりも質を根源的と考え、これを規定するものとしての分業を生産力の基礎とみなしたことをしめすものであろう。(『経済学の生誕』、二二七ページ、参照) しかしその分業が社会的分業をもふくむものであったかぎり、資本制的商品生産＝商品交換のもつ生産力の増大を促進する作用をも意味したことを、忘れてはならない。

(142) Smith, *ibid.*, p. 15. 訳、二二七—二二八ページ。

(143) Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 372. 長谷部訳、五八九—六〇〇ページ。スミスが、マニユファクチュア的分業のほかに社会的分業の存在に気づいていたことは、前者の例としてあげられたビン製造業について、それが分業の結果として一個独立の職業となつてゐる、と述べてゐること (*ibid.*, p. 6. 訳、二二二—二二三ページ。) からあきらかである。社会的分業とマニユファクチュア的分業との差異は、マルクスが指摘しているように、前者のばあいには諸生産者の生産物は商品となるが、後者における部分労働者は商品を生産しないという事実にある。(ebenda)

(144) 内田、前掲書、二二〇—二二二ページ、参照。

(145) Smith, *ibid.*, pp. 15-17. 訳、三八—四二ページ。

(146) Marx, *Zur Kritik*, S. 48. 訳、五三ページ。原始共同体ないしは家父長制家族においては、自然発生的な分業がおこなわれるが、生産物は商品としては生産されな<sup>ら</sup>ず。Cf. *Das Kapital*, Bd. I, SS. 274-276. 訳、五九三—五九四ページ。

(147) 内田、前掲書、二四三ページ、参照。

(148) Meek, *ibid.*, p. 62. 訳、六九ページ。

(149) 第四章は、商品の分析にすぎだつものであるから、そこでとりあつかわれているのは、たんなる生産物の交換過程であり、スマスは、この交換の便宜のために貨幣が考案された、とみなしている。(Ibid., pp. 24-25. 訳、五三一—五四ページ。)したがって貨幣はまったく、交換手段としての機能から説明されている。彼は、第五章で価値論の展開過程において、貨幣の問題にたちかえり、交換手段としての貨幣の機能から価値尺度としてのその機能をひきだしている。(Ibid., p. 34. 訳、七一ページ。)しかしスマスにおいては、価値尺度としての貨幣の機能は、正当に把握されず、交換手段としての機能が優位にあるばかりでなく、前者は後者に解消されているといえよう。(藤塚、前掲書、八九—九〇ページ、参照。)それは結局、スマスにおける価値形態の意識的な把握の欠如にもとづくものである。

(150) Smith, *ibid.*, p. 24. 訳、五三ページ。

スマスは、つづいて、価値の概念を定義して、使用価値と交換価値とを区別し——そればかりでなく、両者をまったく無関係なものとみなしたことは、すでにリカード<sup>(151)</sup>によつて批判されたように、誤りであるが、——たのち、「諸商品の交換価値を規制する諸原理」をあきらかにするために、解決さるべき三つの問題をさだめている。第一に、この交換価値の真の尺度 (real measure) はなんであるか、いかえればすべての商品の真実価格 (real price) はなにに存するか。第二に、この真実価格を組成または構成している諸部分は、なにになら

るか。最後に、これらの価格を構成する諸部分のうちあるものまたは全部を、ときとしてその自然率または普通率以上に高め、またときとしてはそれ以下に低める事情はなんであるか。いいかえれば、諸商品の市場価格すなわち実際価格が、その自然価格 (Natural price) とよばれるものと、正確に一致することを妨げる原因はなんであるか。<sup>(152)</sup>この三つの問題は、それぞれ、第五章（「商品の真実価格と名目価格、すなわちその労働における価格と貨幣における価格について」と）、第六章（「商品価格の構成部分について」と）、第七章（「商品の自然価格および市場価格について」と）に論じられている。

(151) D. Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*, Works of Ricardo, Vol. I, p. 11. スミスが、「(水のよう)に」「最大の使用価値をもつもので、ほとんどまたはまったく交換価値をもたないものがある」というのは正しいが、(ダイヤモンドのように)「最大の交換価値をもつもので、ほとんどまたはまったく使用価値をもたないものがある」というのは誤りである。使用価値は、生活の必要をみたすということを要件とするものではなく、人間の欲望の対象たるものはすべて使用価値である。使用価値は交換価値の素材的担い手であり、したがってその絶対的要件である。

(152) Smith, *ibid.*, p. 30. 訳、六五—六六ページ。

第五章は、さきに見たように、交換価値の真の尺度、すなわち商品の真実価格をあきらかにしようとするものであるが、真実価格とは価値にほかならないのであって、それは労働における価格であり、交換価値の真の尺度は労働であるということが、スミスの主張であるから、ここでの問題は、商品（価値）の質である。（価値の量の規定は、資本の蓄積と土地の私有の成立にともなう、価値法則の<sup>モディファイケーション</sup>変容<sup>(153)</sup>の問題との関連において、賃銀・利潤・地代から構成されるものとして、第六章においてとりあつかわれている。）

そこで、このようなスミスの、価値の質的規定をみよう。彼はまず、つぎのようにいう。「およそ人が富んで

いるか貧しいかは、彼が人間生活の必需品や便宜品や娯楽品を享受することができる程度に、おうじるものである。しかし、ひとたび分業が徹底的におこなわれるようになると、ひとりの人自身の労働が彼に供給しうるところは、これらのものきわめて小さな部分にすぎない。彼は、それらのはるかに大きな部分を、他の人々の労働からひきださねばならない。そこで彼は、彼が支配しうる、または購買しうる労働の量におうじて、あるいは富み、あるいは貧しいということにならざるをえない。したがって、ある商品が、それを所有するが、それをみずから使用または消費しようとおもわず、それを他の諸商品と交換しようとする人にたいしてもつ価値は、それによつて彼が購買または支配しうる労働量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。<sup>(164)</sup>

このようにスマスは、交換価値の真の尺度を、所有者がその商品によつて支配または購買しうる労働量にもとめてゐる。したがって、彼はここでいわゆる支配労働価値説をのべているのである。だが、支配労働価値説は、価値の源泉ないしは原因をあきらかにするものではなく、その一つの尺度（外在的尺度）をしめすものにすぎない。したがって、それは本来の労働価値説ではない。

しかもスマスにおいては、いうところの支配労働量は、他の商品に対象化されている労働量と他人の生きてゐる労働量との二様の意味にもちいられ、両者が混同・同視されている。すなわち、いう。「彼の財産はこの力〔購買力、すなわち労働または労働の生産物にたいする支配力〕の大きさ、いかえれば、それによつて彼が購買または支配しうる他の人々の労働の量、またはおなじことであるが、他の人々の労働の生産物の量に、正確に比例して、あるいは大きくあるいは小さい<sup>(155)</sup>。」と、他の商品に対象化されている労働量は、等価交換を前提するかぎりつねに、その商品に対象化されている労働量に等しいけれども、市場で購買しうる他人の生きてゐる労働

量は、必ずしもつねにそれと等しくはない。実は、生きている労働（≡労働力）が商品として売買されるような状態においては、両者は等しくないのである。したがって、この労働と労働生産物との混同は決定的であり、スミス価値論のすべての理論的混乱の根源はここにあつたのである。<sup>(156)</sup>

(153) 内田、前掲書、二四六ページ、参照。価値の「真の尺度」と価値を「規制するもの」(regulator)という、ミックの区分も、このような視角からなされているとおもわれる。(ibid., p. 60, 69, 訳、六五、七八ページ。)

(154) Smith, ibid., p. 32, 訳、六七ページ。

(155) Ibid., p. 33, 訳、六九ページ。

(156) ミックによれば、スミスは、「商品が価値をえるのは、それが社会的労働の生産物であるからのだが」、「価値の尺度は、その商品の生産の諸条件のなかにはなく、むしろその交換の諸条件のなかにも求めらるべき」であると考えていた、というのであって (ibid., p. 63, 訳、七〇ページ)、それが価値の「真の尺度」というスミスの問題提起の独特の意味であると考えられているようである。そしてしかも、スミスは、ある商品の価値の真の尺度は、「市場でそれと交換されるであろう他の諸財貨に体化された労働の量」ではなくて、「市場でそれと交換されるであろう労働の量だ」と結論した。「この決定のなかに、スミスの価値論に関連する諸困難のうちの一つのものが、起源をもつていた。」(ibid., p. 64, 訳、七一ページ。)という。さらにミックは、スミスのこの決定の理由をたずねて、それを、スミスが、価値の問題を、「資本主義的蓄積過程の分析」との関連において考え、「この過程を、継続する生産週期における、資本家による生産的賃労働の雇用という点から「理解しようとした」という事実に求めている。(ibid., p. 65, 訳、七三ページ。)しかし、ミックはスミスの価値論を支配労働価値説一本に解しすぎているようにおもわれる。(遊部久蔵「労働価値説の歴史と現代」、『経済研究』第八巻第二号、一九五七年四月、一八三ページ、参照。) スミスには、つぎにみるような投下労働価値説があり、それこそが資本

制生産様式のもつとも基礎的な生産関係を表現するものである以上、——ミスには矛盾とあいまいさがあるにしても、——その意義を十分に評価すべきではないだろうか。このような問題は、結局、価値論における歴史と論理との関係をいかに解するかという、方法論上の問題に帰着するようにおもわれる。

## 十四

しかしミスは、交換価値の眞の尺度として、商品の支配する労働量とともに、商品の生産についてやされた労働量、すなわちいわゆる投下労働量の観念をもっている。彼はいう。「すべての物の眞実価格、すなわち、すべての物がそれをえようと欲する人にとって眞実に値いするところは、それをえるための骨折りと苦勞 (toil and trouble) である。すべての物が、それをえてしまった人、そしてそれを他のなにかとひきかえに手ばなし、交換しようとする人にとって、どれだけの眞実のねうちがあるかといえは、それによって彼自身が免れうるところの、そしてそれが他の人々に課しうるところの、骨折りと苦勞である。貨幣または財貨をもって購買されるものは、われわれが自分自身の肉体の骨折りによってえるのおなじく、労働によって購買されるのである。その貨幣またはそれらの財貨は、実にこの骨折りから、われわれを免れさせるのである。それらは一定量の労働の価値をふくむのであつて、われわれはそれを、そのとき等しい量の価値をふくむとおもわれるものと交換するのである。労働は、すべてのものに支払われた最初の価格であり、原初的購買貨幣 (original purchase-money) であつた。世界のすべての富がはじめて購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によつてであつた。<sup>(17)</sup>」ここでミスは、商品の価値を決定するものを、「骨折りと苦心」というやや主観的なたちではなるが、その生産につ

いやされた労働量と考え、——もつとも彼は、それとともに、みずから「免れうる」労働量と、他人に「課しうる」労働量とをあげ、それら三者が相等しいと考えているが、<sup>(158)</sup>——労働が人間と自然とのあいだの物質代謝の過程における唯一の費用であるということに、その基礎づけをみいだしている。したがって、スマスはここでは、投下労働価値説の立場にたっている。

さらにスマスは、この立場を、一定量の労働は、労働者にとっての犠牲として、不変の費用であるということによって、基礎づけようとしている。すなわち、いう。「等しい量の労働は、すべての時と所において、労働者にとって等しい価値をもつといつてよからう。健康と体力と精神が普通の状態にあり、熟練と技巧の程度もまた普通であるならば、彼は、「同一の労働にたいして」つねに自分の安楽と自由と幸福の同一の部分犠牲にせねばならない。彼が支払う価格は、彼がそのかわりとしてうけとる財貨の量いかにかわらず、つねに同一であるにちがいない。……すべての時と所において、それを手に入れることが困難であるもの、すなわちその獲得に多くの労働を要するものは高価であり、容易に、すなわちきわめてわずかの労働によってえられるものは、安価である。したがって、それ自身の価値がけつして変らない労働のみが、それによっていっさいの商品の価値が、すべての時と所において測定され比較されうる、究極かつ真実の標準である。労働はそれらのものの真実価格であり、貨幣はその名目価格にすぎない。<sup>(159)</sup>ここでスマスが、労働を、労働者の安楽と自由と幸福との犠牲とのみ考え、それを人間の正常な生命活動としてとらえていないのは正しくない。<sup>(160)</sup>それは労働を非効用(disutility)とみなす、消費者理論へつながるところをもつ。そして彼が、労働は、同等な人間労働として、同一時間に同一の価値をうむといわずに、このような犠牲として、労働者にとってつねに等しい価値をもつといっているのは、社

会的労働の客観的同等化を、個人の労働の主観的同権化ととりちがえているものである。<sup>(16)</sup>しかしそれにもかかわらず、商品の生産に必要な労働量が価値を決定するという、投下労働価値説、すなわち本来の労働価値説の見地は、ここではいっそう明白である。

(157) Smith, *ibid.*, pp. 32-33. 訳、六七—六八ページ。

(158) これらの投下労働と免省労働と賦課労働とは、個人的にみれば、一定の物の生産に必要な時間には人によってそれぞれ異なるから、量的に一致しない。それらは、社会的平均労働としてのみ、量的に一致する。(平瀬、前掲書、一二二—一二三ページ、参照。)

(159) *Ibid.*, p. 35. 訳、七二—七三ページ。

(160) Marx, *Kapital*, I, S. 51. 訳、一三二—一三三ページ。

(161) Marx, *Zur Kritik*, S. 48. 訳、五三—五四ページ。

以上にみえてきたように、スミスは、交換価値の真の尺度をひとたび支配労働量と規定しながら、その論拠を求めて投下労働価値説に到達したのであるが、そのことは、投下労働価値説が価値の源泉ないし原因をあきらかにするものであるのに反して、支配労働価値説は価値の一つの尺度(外在的尺度)をしめすものにすぎず、後者は前者を前提することなしには成立しえないことを考えれば、当然のことである。

しかし、支配労働価値説を誤りとしてしりぞけるだけでは、十分ではない。むしろ、スミスの支配労働価値説のうちには、——マルクスが指摘しているように、——商品生産社会の成立にともなう富の存在様式の決定的な変化にたいする、彼の洞察がひそんでいるのである。スミスの支配労働価値説をしめす章句(本文六二—六三—

ジにかかげたもの（その他）を引用したのち、マルクスはいう。「ここで強調されているのは、分業によつてもたらされたつぎのような変化、すなわち富は、もはや自分の労働の生産物にあるのではなく、この生産物が支配する他人の労働量、この生産物が購買しうる社会的労働の量——この量は、この生産物そのものにふくまれている労働量によつて規定される——にある、という変化である。……ここで強調されているのは、分業および交換価値によつてもたらされた私の労働と他人の労働との等置、いかえれば社会的労働であつて（私の労働すなわち私の商品にふくまれている労働もすでに社会的に規定されており、その性格が本質的に変化していることを、アダムは見落している）、……事実上 A・スマスがここでいっているのは、諸商品の価値はそれらにふくまれている労働時間によつて規定されており、商品所有者の富は彼が自由にしうる社会的労働の量にある、ということにはかならない。」<sup>162</sup>

すなわち、スマスが商品の価値の尺度を、それが支配しうる他人の労働の量にもとめていることは、商品交換をつうじての個人的諸労働の等置、すなわち社会的労働の把握をしめすものであつて、それによつて彼は、事実上価値の実体（＝抽象的人間労働）を把握したものとさえいう。<sup>163</sup>もつとも、この諸労働の等置は、彼が、その生産に必要な労働量による商品の価値の規定を、その商品が購買しうる生きている労働量によるそれと混同し、<sup>164</sup>かくして「労働の価値」（＝労働力の価値）、事実上賃銀を価値の尺度とするにいたる、誘因をなしていたのであるが。スマスが、価値の実体を事実上把握したことは、マルクスも、スマスは「労働一般、しかもその社会的総姿態における分業、としての労働一般」<sup>165</sup>を把握したといひ、さらにまたスマスは、「富を創造する活動のすべての規定性を放棄し、」商業労働でも、農業労働でも、工業労働でもなく、「そのいづれたるを問わぬ労働一般」<sup>166</sup>を富を創

造する労働とみなしたということによって、みとめていたものとおもわれる。ミスが人間の労働一般を定立したことは、一方では、彼が生産的労働を人間の価値ある行為として把握したことを物語るものであり、そしてそれは古代や中世におけるとは異なって人間の自由と平等の観念が一般に確立されたことの一つのあらわれであった。<sup>(167)</sup>そして他方では、それは彼が、富の源泉を商業活動において把握した重商主義者にたいしてはもちろん、それを農業活動に限定した重農主義者にたいしても、巨大な進歩をなしとげたことをしめすものであった。<sup>(168)</sup>それゆえにこそミスは、「労働をその原理として認識した国民経済学」<sup>(169)</sup>の祖とみなされえたのである。

(162) Marx, *Theorien über den Mehrwert*, Bd. I, *Besorgt von M-L smus Institute*, SS. 41-42. 長谷部訳、九五—九六ページ。

(163) 藤塚知義氏が、「通説が単純に支配労働価値説をもって誤まれる規定となすのと反対に、マルクスは、むしろこの二つの規定の並列そのもののうちに、価値をつくる労働としての一般的・社会的労働（＝抽象的・人間的労働）が事実上、把握されていることをみているのである。」（『アダム・スミス革命』三一ページ）として、『剰余価値学説史』の右の箇所を引用されているのは、ミスの支配労働価値説の意義の強調は重要であるが、投下労働価値説と支配労働価値説との「並列」によって、ミスが価値の実体を把握したとされている点、およびミスによる価値の実体の「事実上」の把握が、行論のうちにその完全な把握にかわってしまっている点において、マルクスからはなれてるようにおもわれる。

しかし岡崎栄松氏（『価値論および分配論におけるアダム・スミスとリカード』（上））、『立命館経済学』第六卷第一号、一九五七年四月）が、藤塚氏を批判して、ここでマルクスのいう「社会的労働」は「他人の労働」の同義語にすぎず、一般的・社会的労働＝抽象的・人間的労働を意味しないとされ、ミスは「価値の実体把握をこころみている」だけで、それに「成功していない」と断定されている（同右、二二—二三ページ）のは、藤塚氏のゆきすぎを正したのはよいが、リカードゥにくらべてむしろいっそう明確な、ミスの価値の実体概念の意義を過小評価するものではないか。社会的労働と抽象的

人間労働とはもとより同一概念ではないが、前者の認識と後者の認識とはきわめて接近したものであり、ここでスミスが他人の労働を社会的労働として把握したことは、私の労働をそれとして把握しえなかったにしても、価値の実体把握に迫っていることをしめすものではないか。またスミスが価値の実体をつかみえなかったとすれば、価値の実体たる人間の「労働一般」——それは抽象的労働の同義語ではないか——を彼が認識したというマルクスのことばをどのように理解するのか。スミス学説の革命的意義を強調して、リカードゥにたいしてスミスを過重評価している藤塚氏と、スミスの「二重性」とリカードゥの「一貫性」という図式によって、複雑な学説の継承・発展関係をわかりきっている岡崎氏とは、それぞれ反対の抽象におちいつているようにおもわれる。

(164) スミスが、購買しうる対象化された労働と生きている労働とを混同したことは、彼にとっては必然的であった。というのは、「労働生産物たる商品の交換は、——貨幣の媒介機能を捨象して、その結果からいえば——その内容においてはすべて労働の交換であり、交換による異質的労働の社会的総労働への結合だというのが、スミスの市民社会分析の出発点であったから。」（内田、前掲書、二五〇ページ）

(165) Marx, Zur Kritik, S. 47. 訳、五二二ページ。

(166) a. a. O., S. 239. 訳、二八二ページ。

(167) 「価値表現の秘密、すなわち、すべての労働が人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間の同等性の概念がすでに国民的成心の固定性をもつときにのみ闡明されうる。だがそれは、商品形態が労働生産物の一般の形態であり、かくしてまた商品所有者としての人々相互の関係が支配的な社会関係であるような、社会におおってはじめて可能である。」（Marx, Kapital, I, S. 65. 訳、一五二—一五三ページ）

(168) 「重金主義は、富をまだまったく客体的に、自己のそとにある、貨幣の姿をした物と考えた。工業主義または商業主義〔「重商主義」〕は、富の源泉を対象から主体的活動——商業労働および工業労働——におきかえたが、これは重金主義の立

場にたいする一大進歩であった。だがそれでもなお、この活動自体は、貨幣をもうけるといふ限定性において把握されてい  
たにすぎなかった。この主義にたいして、重農主義は「さらに一進歩をとげたのであって、それは」労働の一定の形態——  
農業——を、富を創造する労働と考え、客体そのものをもはや貨幣の仮装においてではなく、生産物一般として、労働の一  
般的結果として把握した。だがこの生産物は活動の限定性に相応して、やはりなお自然によって規定された生産物——農業  
生産物、たんなる土地生産物——として把握された。アダム・スミスは、富を創造する活動のすべての規定性を放棄し、工  
業労働でも商業労働でも農業労働でもなく、そのいずれたるを問わぬ労働一般「を富を創造する労働と考えたのであるが、  
これは彼の」巨大な進歩であった。富を創造する活動の抽象的な一般性とともに、いまやわれわれはまた、富として規定さ  
れる対象の一般性を、生産物一般を、すなわちやはり労働一般ではあるが、しかし対象化された過去の労働としての労働一  
般をえたのである。」(Marx, Zur Kritik, S. 239. 訳、二八二ページ。)

(169) Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*, Marx-Engels Gesamtausgabe, Bd. III, S. 107. 邦訳、ポルクス  
■ エンゲルス選集、補巻4、三三〇ページ。

## 十五

以上のようにスミスは、価値の実体としての人間の労働一般を把握したのであるが、それと同時に、彼は価値  
の大きさを、商品の生産に必要な労働時間にはつきり還元している。「資本ストックの蓄積と土地の私有にさきだつ初期  
未開の社会状態においては、さまざまな対象を獲得するのに必要な労働量のあいだの比率が、それらを相互に交  
換するさいに、なんらかの基準(Tulle)をあたえうる、唯一の事情であるようにおもわれる。たとえば、狩猟民族  
のあいだで、一頭の子鹿を殺すのに、一頭の鹿を殺すのに必要な労働の二倍が、通常必要だとすれば、一頭の海

狸は当然二頭の鹿と交換される、すなわちそれに値いするにちがいない。通常二日または二時間の労働の生産物であるものは、当然、通常一日または一時間の労働の生産物であるもの、二倍のねうちをもつはずである。<sup>(170)</sup>

ここでスミスが、「通常 (usually) 二日または二時間の労働の生産物であるものは、云々」としているのは、商品の価値を決定するものが、個別的・偶然的な労働時間ではなくて、社会的・平均的な労働時間であることをみとめていることをしめすものであつて、ここにマルクスの社会的必要労働時間の概念の萌芽をみる事ができよう。<sup>(171)</sup>したがつてスミスは、商品の価値はその生産に必要な労働量によつて決定されるが、その労働量はその生産に必要な平均時間によつてはかられる。それゆゑ、商品の価値の大きさはその生産に社会的に必要な労働時間によつて決定されると考えたのである。

ところで、商品の価値がその生産に必要な労働時間によつて決定されるというばあい、現実には個別的異質的な労働が、いかにして平均化され等質化されるかという問題が解決されねばならぬ。スミスは、「一時間の困難な作業は、二時間のやさしい仕事よりも、多くの労働をふくむかもしれないし、その習得に十年の労働を要する職業における一時間の勤務は、普通のわかりきつた業務における一カ月の勤労よりも、より多くの労働をふくむかもしれない。」といつて、前者の複雑労働を後者の簡単労働に還元する必要を十分意識していた。しかし彼はこの労働の還元が、「正確ではないが、日常の用務を処理してゆくには差支えないといつた程度の大まかな相関係にしたがつておこなわれる、市場のかけひき」<sup>(172)</sup>をつうじて、流通過程において遂行されると考えていたが、実はこの還元は生産過程において成立するのであつて、流通過程においてはただそれが実現されるにすぎない。<sup>(173)</sup>

またスミスは、商品の価値が労働量によつて決定されるということは、「抽象的な概念」であつて、この価値

は、「平明な触知しうるもの」としての「他の商品の量」に表現されねばならぬ。すなわち、その交換価値は労働量によってははかられないで、それと交換される他の商品の量によってははかられ、さらに貨幣が一般的な交換手段となるとともに、貨幣の量によってははかれるようになる、といっているが、これははなはだ不十分なから価値の貨幣への必然的展開をあとづけているものであって、価値形態の認識の萌芽であるといふことができよう。

(170) Smith, *ibid.*, p. 49. 訳、一〇〇ページ。

(171) 波多野鼎『正統学派の価値学説』、二九ページ、参照。

(172) *Ibid.*, p. 33. 訳、六九—七〇ページ。

(173) 岸本誠二郎『労働価値論の研究』、四七ページ、参照。

(174) *Ibid.*, pp. 33—34. 訳、七〇—七一ページ。

(175) 白杉、前掲書、一三九ページ、参照。

しかし、さきの引用句においてもっとも重要なことは、スミスが、商品の価値はその生産に必要な労働時間によって決定されるという原則を、「資本の蓄積と土地の私有にさきだつ初期未開の社会状態」に限定していることである。この「初期未開の社会状態」をいかに解するかは、スミス価値論の解釈における一つの決定的な点である。従来多くの論者によって、この「初期未開の社会状態」は、歴史的な単純商品生産社会と考えられてきた。たしかにスミスの意識においては、そういう解釈を可能にするような要素が多くみられるであろう。しかしスミス経済学の対象そのものが、資本主義社会であると同時に、独立小生産者の社会のいちじるしい残渣をもつものであった。ストックはただちに資本ではなく、ストックの所有者は厳密な意味の資本家ではなく（しばしば前期

的な性格をもち）、土地の私有は必ずしも近代的な土地所有ではない（封建的土地所有をふくむ）。そして彼のいう労働者は、賃労働者のみならず、独立の農民や手工業者のような直接生産者をふくむのである。すなわち、スミスにおいては、独立小生産者の賃労働者への決定的な転化、商品生産の所有法則の資本制的取得法則への転変がとらえられていない。<sup>(17)</sup>したがって、いわゆる「文明社会」は、資本主義社会よりはるかに広い概念であり（それはおよそ私有財産の発生にまでさかのぼるような側面をもつ）、彼のいう「資本の蓄積と土地の私有」との成立は、厳密な意味での資本の本源の蓄積を意味しないのである。<sup>(18)</sup>

それでは、スミスの「初期未開の社会状態」は、いつたいなにを意味するのか。単的にいえば、それはいわば論理的な単純商品生産社会、すなわち資本制生産様式のもつとも基礎的な生産関係としての商品生産関係であるというべきであろう。この商品生産者としての資格以外のものをもたない人間相互の関係を表現するものが、価値法則であり、これにたいしていつそう高度な資本制生産関係——すなわち資本対賃労働の関係、および諸資本の競争関係——を表現するものが、自然価格（＝生産価格）の法則である。スミスは『国富論』において、この二つの法則を同時存在的なものとして定立しているのであるが、そのことは、彼が、これらの法則に反映されている二つの秩序——「初期未開の社会状態」と「資本の蓄積と土地の私有」以後の状態と——をも、段階的なものとしてではなく、むしろ同時存在的なものとして、ただ経済社会のより低い次元とより高い次元とにあるものとして、想定していたことをしめすものであろう。<sup>(19)</sup>もつともスミスにおいて、このような明確な論理的把握が存在していたという意味ではない。彼においては、それが一見歴史的発展段階にあるものとして叙述され、「初期未開の」というような歴史的表現をあたえられていることは、事実である。しかしそれは、彼が啓蒙主義の影響

のもとに、あるべき自然的秩序を過去に実在したものと假想したためにすぎない。<sup>(180)</sup><sup>(181)</sup> 以上のような解釈によつてのみ、スミスの「初期未開の社会状態」を合理的に理解し、価値法則の妥当範囲を前資本主義社会に限定したかのような誤まつた印象から、彼を解放することができるであらう。

(176) そのもつとも代表的な論者は舞出長五郎教授である。教授は、スミスの価値—価格論の第一の問題（交換価値の眞の尺度あるいは眞実価格）は、「資本の蓄積ないし土地の私有に先だつ社会状態」の、すなわち單純商品生産ないし前資本主義社会の問題であり、第二（価格の構成部分）および第三の問題（自然価格と市場価格）は、資本主義社会の問題であるとされ、「前資本主義社会の価値法則」、「資本主義社会の価値法則」の項のもとに、それぞれこれを説明されている。（『経済学史概要』上巻、一四三—一四四、一五四—一五〇ページ。）

(177) 内田、前掲書、二〇七、二〇八、二六二—二六三ページ、および、遊部久藏「スミスのいわゆる『初期未開の社会状態』について」、『古典派経済学とマルクス』、五〇—五一ページ、参照。

(178) 内田、前掲書、二〇六—七ページ、および、遊部、前掲書、五一ページ、参照。

(179) 遊部、前掲書、四九、五四—五五ページ、参照。遊部氏は、スミスにとっては価値法則は第一次の自然であり、自然価格の法則は第二次の自然であった。この二つの法則に表現される秩序は、時間的・繼起的關係というよりもむしろ同時存在的關係にあった。ただ前者は、後者に比して、自然的秩序のより低い次元に位するものとみなされたのである、とされている（同右、四九ページ）が、スミスの「初期未開の社会状態」を、はじめて論理的範疇として明確にしたことは、一つの功績であらう。

(180) 遊部、前掲書、五三—五四ページ、参照。

(181) マルクスは一方では、スミスが資本主義社会における価値法則の妥当性を否定したという解釈をゆるすかのような、つぎのような叙述をあたえている。「アダムはもちろん、商品の価値をそれにふくまれてゐる労働時間によつて規定するが、

労働価値論の生成にかんする一考察（松田）

そのあとでふたたび、この価値規定の現実性をアダム以前の時代にまで後退させてしまう。いかにえれば、単純な商品の立場からみて彼に真実だともおられることが、単純な商品のかわりに、資本、賃労働、地代等々の、より高度でより複雑な諸形態があらわれてくるやいなや、彼にははつきりしなくなるのである。このことを彼はこう表現する。すなわち、人間がまだ資本家、賃労働者、土地所有者、借地農業者、高利貸等々としてではなく、ただ単純な商品生産者および商品交換者としてだけ対応しあっていたにすぎなかった市民たちの失われた楽園では、諸商品の価値は、それらにふくまれている労働時間によってはかられていた、と。」(Zur Kritik, S. 47, 訳、五二ページ。)

しかしそれはスミスの意識にそくした叙述にすぎない。マルクスはもとより、このような「失われた楽園」が過去にはなく、まさにブルジョア社会の側面として実在することを指摘している。「スミスやリカードが出发点とする個々の孤立した獵師や漁夫は、十八世紀の幻覚をとまなわぬ想像物にぞくする。それはロビンソン物語ではあるが、けっして文化史家の考えるように、たんに過度の醇化にたいする反動や誤解された自然生活への復帰を表現するものではない。それがこのような自然主義にもとづくものでないことは、うまれながらに独立している諸主体を契約によって関係させ、結合させるルソーの社会契約がそうでないのと、同様である。……それはむしろ十六世紀以来準備されて、十八世紀にその成熟への巨歩をすすめた『市民社会』<sup>ブルジョア</sup>をみこしているものである。この自由競争の社会では、個々人は、それ以前の諸歴史時代に、彼を一定のかぎられた人間集団の一員にしていた自然紐帯その他から、解放されてあらわれる。スミスやリカードがまだまったくその影響下にあった十八世紀の予言者たちは、十八世紀のこうした個人——一方では封建的社会形態の解体の、他方は十六世紀以来あらたに発展した生産諸力の産物——を、過去に実在した理想として思いうかべていたのである。歴史の結果としてではなく、歴史の出発点として。なぜなら、このような個人は、自然にしたがうものとして、人間性についての彼らの表象にふさわしく、歴史的に成立したものでなく、自然によって措定されたものとおもわれたからである。」(a. a. O., S. 216, 訳、二五六—二五七ページ。)したがってマルクスは、スミスが価値法則の妥当範囲を前資本主義社会に限定し

たとは考えていなかった、といいうるであろう。

それゆえに、「資本キャピタルの蓄積と土地の私有」以後の状態にかんするスミス価値論の変化は、彼が資本主義社会について労働価値論を放棄したということではなくて、彼がきわめて不十分なから、商品生産関係から資本制生産関係への上向にとまらぬ価値法則モディファイレーションの「変容」、いなむしろの発展を認識しようとしたものとして、理解さるべきであろう。スミスは歴史的叙述様式をとっているけれども、問題は実は論理的展開なのである。

まず、「資本キャピタルの蓄積と土地の私有にさきだつ初期未開の社会状態においては」、スミスによれば、「労働の全生産物は労働者にぞくする。そしてある商品を獲得または生産するのに普通にもちいられる労働量が、その商品が普通に購買し、支配し、または交換されるべき労働量を規制しうる唯一の事情なのである。」<sup>(182)</sup>すなわち、このばあいには、投下労働量は支配労働量に等しく、それが商品の価値を決定する。しかるに、資本が蓄積され、土地が私有されるとともに、事情がかわってくる。

すなわちまず、資本の蓄積とともに利潤が発生し、生産物の価値の一部分が利潤というかたちをとる。スミスは書いている。「資本が特定の人々の手に蓄積されるやいなや、彼らのうちのあるものは、当然その資本を勤勉な人々を働かせるのにもちいるであろう。彼らは、勤勉な人々の製品の販売によって、すなわちその人々の労働が原料の価値につけくわえるものによって、利潤をえるために、その人々に原料と生活資料を供給するであろう。完成した製造品を、貨幣、労働、または他の財貨と交換するさいには、原料の価格および職工の賃銀を支払うに足る以上のものかが、この冒険にその資本を賭けるこの事業の企業者の利潤として、あたえられなければならない。したがって職工たちが原料につけくわえる価値は、このばあい、二つの部分に分解する。すなわち、そ

の一部分は、彼らの賃銀を支払い、他の部分は、雇主が前貸しした原料と賃銀との全資本にたいする、利潤を支払う。<sup>(183)</sup>」

ここでスマスははっきりと、利潤は、商品がその価値以上で売られるということからでくるものではなくて、労働者が原料につけくわえた価値の一部分であつて、資本家がこの労働にたいして支払わなかったのにしかもこれを売ることから生じるものである、とべている。「彼は、これによつて、剰余価値の眞の源泉を認識した<sup>(184)</sup>」のである。

しかるにスマスは、このことから、資本の蓄積とともに利潤が商品の価値の構成部分となり、投下労働量のみが価値を決定するのではなくると考える。「事物のこの状態においては、労働の全生産物は必ずしも労働者にぞくさない。多くのばあいには、彼はそれを、彼を雇う資本の所有者と分たなければならぬ。またなにらかの商品を獲得または生産するのに普通にもちいられる労働量は、その商品が普通に購買し、支配し、または交換されるべき「労働」量を、規制しうる唯一の事情ではない。あきらかに、ある追加量が、その労働の賃銀を前払いし、原料を供給した、資本の利潤にたいしてあたえられなければならないのである。<sup>(185)</sup>」

地代についてもほぼ同様である。「ある国の土地がすべて私有財産となるやいなや、地主は他のすべての人々とおなじく、彼らが、かつて時かなかつたところで収穫することを好み、その自然の生産物にたいしてさえ地代を要求する。……労働者は、かくして、自然の果物を集めることの許可にたいして代償を支払わねばならず、そして彼の労働が採取しまたは生産するもの的一部分を地主に提供しなければならぬ。この部分、またはおなじことであるが、この部分の価格は、土地の地代を形づくり、そして大部分の商品の価格において、第三の構成部分

をなす。<sup>(186)</sup> すなわち、スミスは、地代をも、労働者が地主に無償でひきわたす労働の一部分、すなわち剰余価値として、把握している。しかも彼は、そのことから、地代も価値の構成部分となるというのである。

このように、スミスは、利潤および地代を、まず商品価値の分解部分として把握したのち、——ここで彼が、この分解部分を賃銀、利潤、地代であるとして、そのうちに、生産手段を補填する不変資本部分をみとめていないのは、誤りである(いわゆる「アダム・スミスのドグマ」)<sup>(187)</sup>が、——ただちにそれらを商品価値の構成部分とみなしているのである。そして、彼は、すべての商品の価格は、これらの三つの部分に分解するのであるから、一國の労働の全生産物の価格も、同様の三部分に分解し、彼らの労働の賃銀、資本の利潤、または土地の地代として、その国のさまざまの住民のあいだに分配されるとする。そしてつぎに、あたかもその当然の帰結であるかのよう<sup>(188)</sup>に、まったく逆の結論をひきだしている。「賃銀、利潤、そして地代は、すべての交換価値の三つの本源(original source)であるとともに、またすべての収入の三つの本源である。」と。ここで、賃銀と利潤と地代とがすべての収入の本源であるというのは正しいが、交換価値についてはそうではない。

(182) Smith, *ibid.*, pp. 49-50. 訳、一〇〇—一〇一ページ。

(183) *Ibid.*, p. 50. 訳、一〇一—一〇二ページ。

(184) Marx, *Theorien über den Mehrwert*, S. 45. 訳、一〇一—一〇二ページ。

(185) *Ibid.*, p. 51. 訳、一〇三—一〇四ページ。

(186) *Ibid.*, p. 51. 訳、一〇四ページ。

(187) 「アダム・スミスのドグマ」については、拙稿「アダム・スミスの再生産論」、『経済論叢』第六六卷第一・二・三号、

一三六一—一三九ページ、参照。

(188) Ibid., p. 54. 訳、一〇九ページ。

## 十六

これによつてスミスは、価値分解論から価値構成論へ移行しているのであるが、賃銀・利潤・地代から構成される価値とは、実は価値とは異なる自然価格（＝生産価格）にはかならない。したがつて彼は、それとは気づかずに、商品の生産関係の資本制生産関係への展開にとまなう、価値法則の生産価格法則への発展をあとづけていくわけである。しかし彼は、価値と自然価格とを区別しえず、自然価格の構成要素を価値の決定因とみなしているのであつて、労働価値論から生産費説に墮しているといわねばならない。

それと同時に、さきにもたように、投下労働量を、事実上価値の構成部分としての賃銀と同視し、支配労働量は、投下労働量と利潤と地代との和に等しいと考えることによつて、「資本の蓄積と土地の私有」以後においても、支配労働量はいぜんとして交換価値の尺度であるが、投下労働量はそうではなくなると考えるのである。それはスミスの意識においては、たしかに労働価値論の妥当性の制限であろうが、客観的にはやはり価値法則の変容の認識である。

そのことは、スミス価値論のこの移行の、客観的根拠をさぐることによつて、いつそうあきらかになるであらう。スミスはさきにみたように、商品の購買または支配しうる労働量ということばを、他の商品に対象化されている労働量と他人の生きている労働量との、二つの異なる意味にもちいでいるが、結局はそれを、後者すなわ

ち生きて、いる労働量と考えている。したがって、支配労働量は、「労働の価値」、事実上賃銀を意味する。

人々がたんに商品生産者として、商品の販売者および購売者としてのみ対応するばあい——商品生産関係——には、商品生産者は十二時間労働の生産物である一商品をもつて、他の商品に実現されている十二時間労働を買う。したがって彼の労働の価値は、彼の商品の価値に等しい。一定量の生きている労働は、同一量の対象化された労働と交換される。このような前提のもとにおいては、労働の価値は、商品にふくまれている労働量とおなじように、商品の価値の尺度たりえた。しかるに、生産手段が特定の階級にぞくし、労働者は労働力のみを所有するばあい——資本制生産関係——においては、反対のことがおこる。労働の全生産物またはその価値は、労働者にぞくさない。一定量の生きている労働は、同一量の対象化された労働を支配しない。または、商品に対象化された一定量の労働は、商品そのものにふくまれてはいるよりも大きな量の生きている労働を支配する。

ミスは、正当にも商品および商品交換から出発し、ここでは生産者たちはたんに商品所有者としてのみ対応しあうのであるから、彼は、資本と賃労働との、対象化された労働と生きている労働との、交換においては、商品交換の一般法則が止揚され、商品（労働という商品）が、それらがあらわす労働量に比例して交換されない、ということを見出す（発見したように彼にはおもわれる）。そこで彼は「資本の蓄積と土地の私有」以後においては、労働時間は商品の交換価値の尺度ではなくなる、と結論したのである。<sup>190</sup>

したがってそれは、もとより単純商品生産社会から資本主義社会への歴史的発展を反映したものではあるが、直接には、資本制生産様式におけるもつとも簡単なもつとも抽象的な生産関係としての商品生産関係から、そのいつそう複雑ないつそう具体的な関係としての資本制生産関係への論理的展開にもなう、価値法則の発展の歪

められた認識であつたといえよう。というのは、つぎのような意味である。ここでスミスによって、「労働の価値」として意識されているものは、実は労働力の価値である。労働力の価値は、他のすべての商品の価値とおなじく、この特殊な商品の生産したがってまたその再生産に必要な労働時間によって、いいかえれば労働者とその家族の生活資料の生産に必要な労働時間によって、決定される。しかし労働者は、現実には、労働力の価値を、すなわち賃銀の等価を再生産する労働時間をこえて、資本家のために無償で労働している。したがって、商品に對象化された労働量、すなわち商品の価値は、その商品を生産した生きている労働量、すなわち労働力の価値よりも、——剰余労働、すなわち利潤および地代として資本家と地主によってえられる剰余価値の大きさだけ、——大きいのである。この事実をスミスは、逆に、商品に對象化された一定量の労働は、その商品にふくまれているよりも大きな量の生きている労働を購買するというふうに、意識したのである。しかも彼は、この資本と労働とのあいだの交換の特殊性から、商品交換の一般法則についてさえ混乱におちいったのである。スミスの誤りは、彼が労働力が商品となるということ、およびこの商品の特殊性——その使用価値そのものが価値の源泉であり、その消費そのものが価値の創造であるという——を理解せず、皮相に労働が売買されると考え、しかも資本としての商品の価値増殖は、それにふくまれている労働量に比例しない<sup>(192)</sup>で、それが運動させる生きている労働量に比例するという<sup>(193)</sup>ことを、意識せざるをえなかつたところにある。したがって、スミスは、資本対賃労働の生産関係を表現する剰余価値の法則を、商品生産関係を表現する価値法則の発展として、正しく把握することはできなかつたが、顛倒的な形態においてであるとはいえ、資本制生産のこの最奥の秘密にふれているのである。

リカードがスミスを批判して、商品にふくまれている労働量と労働の価値とは、それらが一致するかぎりに

において、ともに商品の価値を決定するといつてさしつかえないが、それらが一致しなくなったときに、商品の価値はそれにふくまれてゐる労働量によって決定されるという正しい規定のかわりに、それが労働の価値によって決定されるという誤つた規定をもちだすことはまちがいであるといつてゐるのは、もちろん正しいけれども、リカードは、スミスが問題としていた、資本関係の成立にともなう価値法則の発展に、まづたく気づいていない点において、スミスよりも劣つてゐるのである。<sup>(195)</sup>

(189) Marx, *Theorien*, S. 36. 訳、八八ページ。

(190) a. a. O., SS. 37-38. 訳、八九—九一ページ。

(191) a. a. O., SS. 53-54. 訳、一一四—一四一ページ。

(192) a. a. O., S. 43. 訳、九八ページ。

(193) ミークは、スミスが商品の価値の尺度を、それと交換される労働生産物の量ではなくて、労働の量にもとめた理由を、彼が価値の問題を、資本主義的蓄積過程の分析との関連において考えたことにみいだし、つぎのように説明している。

「資本家的雇用者は、商品の生産を、それをみずから消費したいとか、生活資料と交換したいとかいうためではなく、利潤をえてそれを売り、資本を蓄積したいために、組織するのであるが、彼の観点からすれば、これらの商品の『真実価値』のもつとも適当な尺度は、それらのものの売り上げによって、彼が、つぎの生産週期に支配しうる賃労働の量であるとおもわれるのは、当然である。その商品が支配する賃労働の量が大きければ大きいほど、彼の労働力にたいして彼が追加しうるものも大きく、したがつてまた、蓄積しうる額も大きいであろう。だから、資本家にとっては、『労働』——その商品の売り上げが市場で雇うであろう賃労働の量——が、その商品の価値の『真の尺度』であるとおもわれるのは当然である。」(Ibid., pp. 65-66. 訳、七四—七五ページ。傍点引用者。)と。これは、右のマルクスの簡潔な規定の詳細な敷衍として、妥当なものとお

もわれる。

しかしミークが、つづけてつぎのようになるとき、はたしてスミスの真意に史実なものであるか。「このような価値尺度の助けによって、投入と産出との双方を、両者のあいだの量的な価値の差——資本主義的生産過程において生じた剰余……—があきらかになるようなやり方で、共通の要素（『労働』）に還元することが、可能だとスミスは信じた。一国の生産物が買ったり支配したりするであろう労働の量（すなわちその生産物の価値）は、一般に、それを生産するに要した労働の量（すなわちその生産物の原価）よりも大きいのであって、これら二つの労働量の差は、その社会がつぎの生産週期におこなないうる蓄積額の、尺度なのであった。」(ibid., p. 66. 訳、七四—七五ページ。)はたして、スミスにおいて、価値と対立するものとして、「原価」という概念が考えられていたであろうか。ミークは、スミスを、支配労働価値説一本に解しすぎているようである。「スミスの『真の尺度』は、価値論のなかへ、不必要な二元論の導入をもたらした。」(ibid., p. 78. 訳、八九ページ)というミークの結論も、ある程度まで、スミス自身よりも、ミークの解釈がもたらしたもののおもわれ

(194) Ricardo, Principles, Works, Vol. I, pp. 13-14. Cf. Marx, Theorien, SS. 38-39. 訳、九一ページ。

(195) a. a. O., S. 54. 訳、一四四ページ。

以上にみたように、スミスは、「資本<sup>ストック</sup>の蓄積と土地の私有」以後においては、商品の真実価格（＝価値）は、その生産に必要な労働量のみによって決定されず、賃銀、利潤および地代から構成されるというのであるが、このことによってそれは自然価格 (natural price) に転化される。スミスの自然価格は、事実上費用価格、すなわち消費された不変資本（これは彼によって見落されているが）および可変資本の価値と、平均利潤の和にあたりしたがって価値とは異なる生産価格にはかならない。そのことは、つぎのような彼の規定によって、あきらか

ある。「ある商品の価格が、それを産出し、精製し、市場へ搬出するためにもちいられた土地の地代と労働の賃銀と資本の利潤とを、その自然率にしたがって支払うに足り、それ以上でもなければそれ以下でもないならば、その商品のそのばあいいわゆる自然価格で売れるのである。」<sup>(196)</sup>ここに賃銀、利潤および地代の自然率 (natural rate) とは、その普通率または平均率のことであり、したがってスミスは、平均賃銀のみならず、「平均利潤」の明確な概念をもっていた。すなわち、彼は資本と労働の移動が自由なばあいには、利潤は、諸資本の競争によつて、資本の量にたいして一定の比率をもつにいたると考えていたのである。<sup>(197)</sup>したがって彼の自然価格は、平均利潤をふくむ生産価格にはかならない。(もつとも、それが自然率の地代をもふくむかぎりでは、彼の自然価格は生産価格と異なるが。)そしてこの自然価格は、商品の市場価格が、商品の供給量とそれにたいする有効需要の量との関係いかにしたがって、それをめぐつて変動し、たえずそれにひきつけられているところの中心点とみなされていた。<sup>(198)</sup>

(196) Smith, *ibid.*, p. 57. 訳、一一四ページ。

(197) *Ibid.*, p. 89. 訳、一七三—一七四ページ。

(198) *Ibid.*, p. 58, 60. 訳、一一五、一一九ページ。

かくしてスミスは、まさに、価値法則と自然価格の法則とを、同時存在的なものとして、定立したのである。もつとも彼は、両者の関係をあきらかにすることができなかったが、前者は資本制生産様式のもつとも基礎的な生産関係たる商品生産関係を表現するものであり、後者はより高度な資本制生産関係(資本対賃労働の関係および諸資本の競争関係)を表現するものである。したがって、価値論におけるスミスの移行——支配労働量と投下

労働量とを価値の尺度とみなすことから支配労働量のみをそうみなすことへの、また価値分解論から価値構成論への移行——は、けつして資本主義社会とついでに労働価値論の放棄ではなく、不完全ながら、資本主義社会における簡単に抽象的なものから複雑で具体的なものへの論理的上向にとまなう、価値法則の発展の認識だったのである。<sup>(199)</sup>

かくしてアダム・スミスにおいて、労働価値論は、経済学体系の基礎にすえられると同時に、もとよりなお不完全で不明確ではあるが、自然価格論（＝生産価格論）にいたる展開をふくむ、その全姿容をあらわしたのである。このようなものとしてののみ、すなわち本来の資本制生産関係の表現たる自然価格論と同時的のみに、はじめて労働価値論が定立されえたということは、興味ふかいものである。もつとも簡単な範疇は、實際上高度に発展した資本主義社会の一面としてのみ、認識されたのである。リカードゥにおいて、いわゆる価値修正論というかたちで、するどく提起され、<sup>(200)</sup>マルクスによって解決された、資本制生産様式の本質——価値法則——と現象形態——生産価格法則——との矛盾の存在を、スミスも彼なりに気づき、彼なりに解答しようとしたのである。したがってスミスは、あくまでも偉大な労働価値論者であった。<sup>(201)</sup>彼の問題把握と解答とが、マルクスはもとより、リカードゥのそれよりもはるかに劣っていることは、けつしてスミスの不名誉ではない。彼はこの科学の創始者であり、彼なしには、リカードゥはもとより、マルクスもおそらく彼の解決に到達しえなかつたであらう。<sup>(202)</sup>

<sup>(199)</sup> スミスの方法論にたいする、マルクスのつぎのような有名な特徴づけも、右のような立場からもつともよく理解されるようにおもわれる。「スミスは非常な素朴きで、たえまない矛盾のうちに動揺している。一方では彼は、経済的諸範疇の内的連関を——すなわちブルジョアの経済体制のかかれた構造を、探究している。他方では彼は、これとならんで、競争の諸

現象のうちには外観上あたえられているままの、したがって非科学的な観察者にとつて、また同様にブルジョアの生産過程にとらわれており、それに利害関係をもつ者にとつて、あらわれるままの連関をおいている。この二つの把握の仕方のうちひとつは、ブルジョア体制の内的連関を、いわばその生理をつきとめるものであり、他のひとつは生活過程の外面にあらわれるものを、それがあらわれ現象するままに、記述し、分類し、物語り、かつ図式的な概念規定をあたえるにすぎないものであるが、スマスにあつては、これら二つの把握の仕方は平気で並存しているばかりでなく、たがいに交錯し、たえず矛盾しあっている。このことは、彼にあつては、……当然であつた。なぜなら彼の仕事は実際に二重だつたからである。彼は、一方ではブルジョア社会の内的生理をつきとめようところろみるが、他方ではこの社会の表面的にあらわれる生活諸形態をはじめて描写し、その外面的連関を叙述しようとし、そしてまた、これらの現象をあらわす術語とそれに適応する概念とをみつけたところろみる。一方の仕事は他方の仕事に劣らず、彼に興味を感じさせる。そしてこの二つの仕事があつたがいに独立しておこなわれているために、まったく矛盾する表象がうまれてくるのである。」(Marx, Theorien, Bd. II, herausgegeben von K. Kautsky, SS. 3-4. 長洲一二訳、国民文庫(2)、一一—一二ページ。)ブルジョア体制の内的連関を表現する価値法則とその外面的連関を表現する生産価格法則との関係は、もとより直接には歴史的というよりも論理的なものであり、スマスの二つの把握の仕方が矛盾していたにしても、彼も根本的にはそのことを知っていたとおもわれる。だから彼は、ブルジョア社会の本質的關係の把握としての労働価値論を、いくたの矛盾にもかかわらず、固持していたのである。スマスの労働価値論(したがって価値分解論)は、彼の生産費説(＝価値合成論)が「日常経験」にもとづくものであるのになんてして、「歴史的経験」を基礎とするものであり、スマスにとつて「資本主義社会も労働価値の原則が貫いている社会」であつたとされる岸本誠二郎教授の見解(前掲書、六七—六八ページ)も、基本的に、右のような見地にたたれるものとおもわれる。

(200) リカードウの価値修正論については、拙稿「リカードウの絶対価値論について」、『立命館経済学』第五卷、八八—九

○ページ、参照。

(201) ミークのように、スミスは、「価値論のなかへ、不必要な二元論を導入」した。すなわち、「産出の価値は、それが購買または支配するであろう労働の量ではかられ」、「投入の価値は、結局、その産出を生産するのに要した労働の量ではかられた。」そして彼が「可能な蓄積の正しい尺度とみなしたのは、これら二つの労働量のあいだの差だったのである。」(Ibid., p. 78. 訳、八九ページ。) というふうに、スミスの価値論を支配労働価値説一本にわりきり、しかも、「商品に体化された労働の量は、近代的諸条件のもとでは、もはやそれが購買または支配するであろう労働の量を規制しない、というスミスの結論。」(Ibid., p. 79. 訳、九一ページ。) というふうに、スミスの価値論における移行をまったく歴史的なものとして理解するならば、「スミスが労働価値論を『拒否』したのだとはのめかすのは、……馬鹿げているほどである。」(Ibid., p. 80. 訳、九二ページ。) といってみても、その説得力は必然的に弱まらざるをえないだろう。ミークは、スミスが、「商品を生産するのにもちいられた労働の量が、「どの程度」まで、「その価値を規制する」か、という問題をたずねた「最初の人であった」という事実にも、最大の重要性をみとめることによって、それに応答しているけれども。(Ibid., p. 81. 訳、九三ページ。)

(202) 遊部久蔵氏のつぎのような結論は、まったく正しいとおもわれる。「マルクスは単純に、スミスが価値法則の資本主義社会における意義を否定したと解しえなかった。……いな、マルクスによって価値法則における歴史と論理との統一がなされたのも、スミスにおけるこのような「重要」な諸矛盾にかくれた「正しい本能」を異常な嗅覚によってかぎだし、つきとめ、しかもこれを批判的に撰取した点にあるといえよう。」(前掲書、六五ページ。)